

エ8462

33

565

真宗勸學院教授 小野茂吉編

古中

三重縣史料

自後奈良
至正親町

五卷

33-565

第五卷目次

- 關岡城陥落……………一
- 北島晴具……………五
- 六角家と千種家……………九
- 大久保千種春日部の戦……………一四
- 千種春日部の戦役……………二六
- 六角と神戸との戦役……………三二
- 關神戸兩黨の戦……………四二
- 長野と北島との戦役……………四八
- 長野と神戸との戦役……………五九

第六卷目次

- 仁木友梅の退居……………一
- 徳政の亂……………三
- 三好義繼伊勢を侵さんとす……………四
- 蒲生家と關家との關係……………一〇
- 勢州の四雄……………一五
- 北勢四十八家の由來……………三九
- 乙部家の由來……………五一
- 伊賀侍の由來……………五五

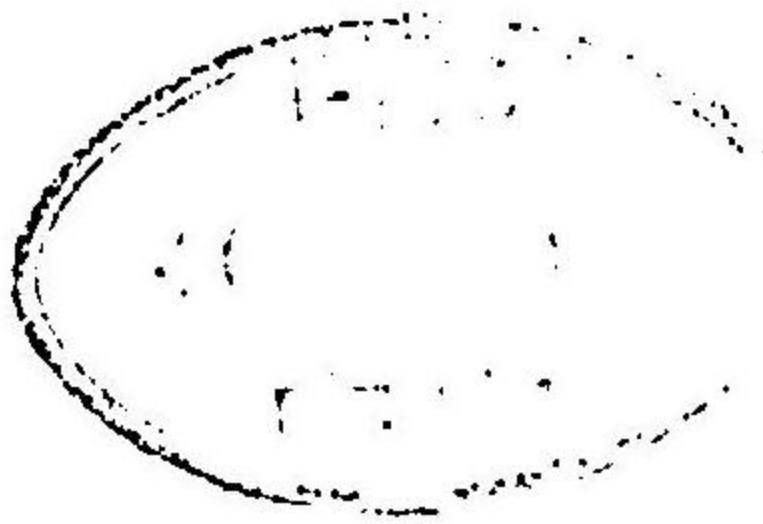
中三重縣史料 卷五

足利氏中

關岡城の陥落

伊勢國司傳記に曰く

(一) 永正七年八月大和國筒井某甲より勢州河曲郡神戸の關家へ使あり兩人商人にまねてれん尺をかたにかけ通りしか荒木の關所の前にてあやしめとかめければ一人の者はとかく無言にていたりしか今一人のもの色々ちんしけれども關所に不用すてに口論に及びけり彼もの氣早なる者にて火打丁と打付てをいの中に入持し紙包の物を焼捨りれより關所の者と差違て死てけり残る一人もかくのことも云はさりしかのかれましきと思切よき相手とをほしきものに飛かゝり引組て差違て死てけり這事勢陽へもきこは關家にもいこんにをもひしたりふし江州の六角は兼て服部家と不和にして何卒して服部を斬從へんと折をうかふところ



33-565

古中三重縣史料 卷五

足利氏中 關岡城の陥落



伊勢國司傳記に曰く
 (一)永正七年八月大和國筒井某甲より勢州河曲郡神戸の關家へ使あり
 兩人商人にまねてれん尺をかたにかけ通りしか荒木の關所の
 前下であやまらぬと
 しが今一人のもの色々ちんしけれとも關所に不用すてに口論
 に及びけり彼もの氣早なる者にて火打丁と打付てをいの中に入
 持し紙包の物を焼捨りれより關所の者と差違て死てけり殘る一
 人もかくのことも云はさりしかのかれましきと思切よき相手と
 をほしきものに飛かゝり引組て差違て死てけり這事勢陽へもき
 こは關家にもいこんにをもひしたりふし江州の六角は兼て服部
 家と不和にして何卒して服部を斬從へんと折をうかふところ

明治 40 10 9 内務

○六角の千早	九
○大久保正利率兵の勢	四
○關岡城の陥落	三
○勢州河曲郡の神	二
○筒井某甲の	一
○伊勢國司傳記	五

第六卷目次

○仁木文房の遺言	三
○關岡の	二
○三好長實の	一
○清生家と關岡の關係	四
○勢州の四雄	三
○永正四十八年の由來	二
○乙部家の由來	一
○伊勢傳の由來	五

に近年は關家と交をなしむつましければよき幸と關家より六角へ談しける六角も兼て望む所なれば一味同心して伊賀國を攻捕らんと相進て定めけるとなん

(二)

大和國には筒井某甲使者を討せて立腹限なく九月十七日に國中の諸士與力の面々に使を立此趣を廻文に書き此度各の加勢を受け伊賀の國を打敗り本望を達せんとも頼ける翌日辰の刻より申の刻までに與力の諸士又かたひの覺安寺に相聚ける一番に井戸の一家井上等南方には今井吉定廿七騎にて馳來る阿部六郎光遠同兵助吉遠豊田四郎左衛門尉同五郎太郎同資友細井戸太郎左衛門尉仲政出雲三郎末定同九郎末吉箬中忠藏三橋右衛門佐同五郎四郎三輪太郎左衛門尉同四郎依定大隅四郎次郎同五郎四郎豆越左近同次郎依近横田次郎兵衛尉定遠和田五郎正依三河安左衛門尉定豊新庄彌平太近光生駒七郎左衛門尉貞基久保田甚十祐光龍田平藏龍野九郎を馳來りける其外の人々は酉戌の刻に至るまで雲霞のごとくあつまりける

其頃江州口より六角攻よする關かふと谷より神戸關の一黨よせ來り柘植さなこに陣をとる大和勢は上野口までよせ來り山々谷々まで人數は入みちて野陣をとりける明る十九日卯の刻の頃江州六角は服部の城を攻め大和勢は荒木の城に攻よりて其日の申刻に落城して其より關岡の城に攻かゝる神戸關の一黨は山田栗長野工藤家を攻ければ國中の諸士一方に加勢すれば一方は敗れ三日の内に不殘城は落されたとなん

(三)

關岡の城には一族二百六十三人近郷の雜兵百八十餘籠りし上下五百人にはたらさりけり大和勢の一の木戸を攻破りけるか山城なればたやすく城中に入り兼て衆たまりしてりあどせいを待たりける城中には静まりきつて待請て精兵を揃て散々に射たりけり先陣に進來る兵を六十五騎射ふせたれば寄手の者共散々に射立られしらしきつて引へけるか井戸小太郎馳せ來り是ほどの小城の一つ二つを攻あくむと云ふ事があるへきとていさめわかもの共と云まゝに先勢討るれともあど勢は其上をのりこねくか

け山岸ともいわす攻のほり互に打物に成て戦ひけり城中の者と
もは兼てより覺悟の事なれば一人も不殘討死をうしたりける城
中には火を付て大將も雜兵もいつれも見分る者もなかりけりい
かなる運のきはめにや一門一族残りなくかゝる時に滅ひけるこ
ろうたてける

(四) 關岡城主氏則子息三人あり兄氏元次男氏光は父子相共に一所に
討死したまふ三男清祐は六歲當歳の女子萬龜御領は先月より勢
陽國司の許にて成長したまう清祐十一歳にして南都大乘院の坊
官眞乗か妻は氏則か妹にて清祐かをはなれば眞乗の許に在ける
となん清祐大永七年廿三歳にして眞乗の許を出て將軍義晴公の
近習に仕へたまひけるとなん

北畠系譜に曰く

永正八年三月北畠材親老す子晴具嗣く

元長記曰く(永正九年十一月十九日)

皇大神宮の玉串門火きて延て蕃垣門に及ぶ

北畠晴具

伊勢國司紀略に曰く

(一) 此歲京都將軍義輝公阿波の義晴公阿波の義維將軍の攻め登るを
きゝて近江の國朽木谷へ落失せて餘多の年月を経給ふ細川道永
禪門も(高國)一所に忍ひ居りしかかくありては大義の計略叶ひか
たし諸國を廻りて潜に諸將を語らひ敵徒を退治せはやとて公方
に御暇を乞ひ朽木谷を立ち出て、伊賀國へ打ち越へ仁木伊賀守
義廣を頼み夫より伊勢へ立ち越へ國司晴具卿の許に須臾く頼み
居たりけり

(二) 此國司は道永の錐なりければいと念頃にもてなし給ひ何時にて
も加勢參らすへき由申さる道永こゝに滞留しける内に法號を常
桓と改むつらく伊賀伊勢を見るに其頃國中兵亂打つゝき一統
せさりしかは大義の催叶ひ難しと思ひて又江州へり歸りける其
後享祿四年常桓三好海雲の爲に軍を敗られ攝州大物の庄にて切
腹せんとする時辭世の和歌數首ありける内に伊勢の國司へ

繪にうつし石を作りし海山を

後の世までも目かれすや見ん

六

(三) 天文元年十月南都一向宗の一搔起る大將は南都の町人雁金屋願了同金五郎といふ者なりかくて當國宇陀吉野伊賀國名張の一搔等悉く合して一となり伊勢國へ亂れ入る國司之を拒き給はん用意ありけるに老臣等申さくかゝる賤しき土民の奴原に歷々の侍はかりをさし向け防かんとすること本意には候はすとて當國山田の庄の穢多非人をかり催ふし紙小旗一様に穢多といふ文字を書き付けたるを持せて眞先に押し立て進ませたり去る程に一搔共其小旗の文字を見ていかに賤しき我々にても穢多非人を相手に合戦はすましとてちりくになりける處を先に進みたる穢多をしかけ武士ともためき叫んですきまもなく追ひつけあますなもらすなとて一搔をうちとりければ願了兄弟辛き命を助かりて大和國へ逃歸りぬ

正祿間記に曰く(享祿元年正月廿一日)

細川高國三好元長と和す已にして三好政長柳本賢治密に元長を細山晴元に繞す晴元是を信し和議遂に敗る時に近江越前の兵國に還る義晴奔りて朽木植綱に寄り高國伊勢に走り北畠晴具に投す

重編應仁記に曰く(天文元年八月廿四日)

六角定頼法華の徒と兵を合せ晴元を援け火を放ちて本願寺を攻む十月奈良の一向宗起りて本願寺に應ず大和伊賀の土兵之に黨し伊勢を侵す北畠氏の老臣以爲らく匹夫亂を作す抗するに足らすと則屠乞丐を集め之に當らしめ紙旗を掲げて進ましむ每旗奮して何屠隊と土兵望み見て之と戦ふを愧ち皆潰散す將士進み擊て之を平らく

徳川歴代記に曰く(天文四年十二月四日)

岡崎城主松平清康其臣安倍正豊の爲に弑せらる清康の子廣忠甫めて十歳安倍定吉之を輔く松平信定岡崎を奪ふて自立するに及んで安倍定吉廣忠を助けて伊勢に奔る

七

北畠系圖に曰く(天文五年八月)

八

伊勢國司北畠晴具老す子具教嗣く

伊勢國司紀略に曰く

天文十三年九月國司當國の關長野美濃の土岐越前の淺倉と共に近江の六角家に加勢して京極佐々木六郎を攻めらる十二月廿二日京極遂に打ち負け自殺せり其後淺井亮政京極の跡を給わりたれども國人多く背きければ國司及諸家に加勢を乞ひ江北五郡漸くに鎮まりたり(江濃記)

勢陽雜記に曰く

天文年中田丸家の侍山岡一等池田伊賀守逆心して田丸を攻めける田丸彈正少弼顯晴防き戦ひけれども終に討負け討死す少弼自害しけり此故に國司晴具諸卒を引卒し田丸へ出て山岡一等か楯籠りし山上の城を責め玉ふ山岡叶わすして攻め亡さる國司又少弼の子中務具直を取り立て田丸の御所と號す

六角家と千種家

伊勢軍記に曰く

(一) 維時後奈良院の御宇弘治年中近江國六角左京大夫源義賢卿伊勢國を謀らんと欲し小倉三河守を以て大將と爲し三千の軍兵を相副へ勢州に遣わす彼義賢は宇多天皇の後胤佐々木源三秀義の嫡流幕の紋は四目結なり其比隣國に於て威を逞ふする人なり小倉三河守軍勢を率ひて勢州に發向し先三重郡千草城を攻む千草家武威を勵まし防戦する故に良久して勝負を決せず此時近江の衆伊勢千草城攻の由今様の小謠を作りて之を謠ふ

伊勢の千草の城攻むる寄衆に我殿御はかくれあるまい肩白の具足に皆熊のうつほに腰小旗赤い頭らに白木の弓は我殿然れども義賢和睦す之を以て六角家の執權後藤但馬守の舍弟千草家の養子と爲り後千草三郎左衛門尉に任す彼後藤但馬守は後藤兵衛實基の後胤播磨國の住人後藤三郎左衛門尉基明の嫡孫にして其頃六角家に於て第一の臣下なり此時千草家の使は始めて

九

六角家に往く義賢問て曰く千草家は何人の大將なるや使者曰く
一千五十人の大將なりと使者國に歸りて之を語る千草家問て曰
く汝五十とは如何使者曰く我五十を加ふるを以て敵讎に其千を
知り候と其後伊勢國の千草家始めて六角家と一味す之に依りて
小倉三河守千草家をして同心せしめ三重朝明兩郡の西方の諸侍
を攻む故に宇野部後藤家朝明加用家以下諸侍自然に六角氏の幕
下に屬す

勢陽雜記に曰く

北伊勢には千種宇野部後藤赤堀楠稻生南部加用梅津富田上木白
瀬高松持福木俣等四十八家の者何事も一味同心しけり其中に千
種家は千騎の大將故大形當家に心を合せけり斯て弘治三年乙卯
三月に近江六角左京大夫源義賢は北伊勢を攻め取らんとて小倉
三河守に三千餘騎を相添へ先千種を攻めけるか千種某叶わすし
て小倉に一味しけり此故に宇野部加用も小倉に従ひける

北畠物語に曰く

勢州北方の諸侍は昔し源平治世以後北條足利の代々領地を賜ふ
の人々なり三重郡千種家是一千の大將なり其外北方の諸侍都合
四十八家あり各足利氏の侍として一味同心する者なり

同書に曰く

(一) 弘治年中江州六角左京大夫源義實伊勢國を謀らんと欲し小倉三
河守を大將とし三千餘騎を差し添へ勢州へ遣わす彼義實は宇多
天皇の後胤佐々木源三秀義の嫡流數代近江の管領たり武威逞ま
しく家人數多扶持しければ事にふれて不足なし既にして小倉軍
勢を引具し勢州に發向して先三重郡千草城を攻め千草家武勇を
勵まし防ぎ戦ふ是によりて較久しく勝負を決せず此戦敵味方は
なやかに戦ひければ江州の住人等千種の城攻の様躰を今様に作
りて歌ふ其後義實知慮を以て和談を調へ六角家の執權後藤但馬
守秀勝か舍弟を以て千種家の養子と定め千種三郎左衛門尉と號
す彼後藤但馬守は後藤兵衛尉實基か末葉播州の住人後藤三郎左
衛門尉基明か嫡孫にて當時六角家第一の臣下なり

(二) 此時千種家より六角へ使を遣わす義實對面して問て曰く千種家は凡何程の大將や答へて曰く一千五十の大將なり使者歸國して此趣を語る千種問て曰く汝五十を加ふることは何りや使者畏まり某五十を加ふるを以て敵たしかに其千を忘れすと主人甚た感す夫より勢州千種家六角と一味たれば小河三河守千草家に便り三重朝明の兩郡を攻め並に四方の諸士を攻むる故宇野邊の後藤朝明の加用以下の諸侍自然に六角家に屬すと云ふ

北伊勢軍記に曰く

(一) 弘治二年丙辰三月江州六角左京大夫源義賢伊勢國を責めんとて家臣小倉三河守に三千餘騎の軍兵を差し添へ勢州へ遣わす三河守三千餘騎を率し上津畑越にて宿野河原に陣を取り既に千種へ寄せんと欲す常陸介此由を聞き夫太公の詞にも先んすれば必利ありと云へり其故軍は來銳を避けて惰を討つを第一とす然るに江州勢長途の阻を越し勞れたらん其惰を討たは速に勝利を得へしと家臣荻澤備前守五百餘騎の軍兵に野武士少々相加へ差し向

わる備前守五百餘騎引率し既に敵の後へ巡りまた夜のほの闇き中にさきの聲を上げ早鎧砲を打ちける三河守さきの聲鎧砲の音に驚き馬よ物具よと周章てたる處を千種勢縦横に驅けたて南北に追ひ立つるされとも三河守物慣れたる兵なれば少しも騒かす我勢を所々に集め魚鱗に備を立て勇みほころて千種勢へ打ちかける備前守虎頼に兵を備へ待ち掛けたり兩陣互に入り亂れ火花を散して戦ひけるされとも江州勢大勢爲りと雖山路を越し長途の疲れに弱りけん一戦に打負けて菰野まで引きけり備前守續て寄すにも及はず打取る所の首少々取り持ちて千種へ歸りける

(二) 江州勢は夫より江州へ歸り義實に軍の次第申しける義實聞給ひて然れば先千種と和睦し其後方便を以て勢州を攻め取らんと給ひける則千種へ使者を以て和睦爲すへきの由申し遣はしける常陸介元來思慮淺き人なる故家臣と相談に及はず使者を色々に變應し和睦を爲すへきの由返事す義實は斜ならず悦び給ふ則家臣後藤但馬守義勝か弟縫殿助を以て人質とし養子に遣わしけれ

一四
は常陸介實子なき故大に悦び則家督相續として千種太郎左衛門
忠基と名乗り諸人之を崇敬せり之に因りて勢陽暫らく静まりけ
り

大久保千種春日部の戦

伊勢軍談に曰く

(一) 潤田城主大久保城之助なる者あり潤田及音羽を領す人と爲り磊
落奇傑にして人の下風に立つを好まず千種の隣郷なれども千種
家の幕下に屬せずして獨立す千種家常に之を含む會て使者を潤
田に使はして謂て曰く忠治近江の六角と水魚の交を結ぶ今や六
角家は伊勢に侵入して北勢の諸城を併呑し關峰神戸を平けんと
欲して兵を召す貴殿は近隣の事なれば彼の召に應じて兵を出す
へきや否と其語頗る傲慢なり

(二) 城之助使者に向ひて曰く此度の義に付き依頼さるゝに於ては武
家の義として争てか與力せざらんや然れども我が命に従へとの
辭に至りては決して承諾する事能はず我苟しくも祖出より此地

を領し身不肖なりと雖敢て國司の下すらへも附屬せず況んや千
種の指揮の下に屬せんやと辭色共に厲し忠治聞きて大に怒り急
に之を攻め滅さんとし水谷平太左衛門山木縫殿介に命し三百餘
人を率ひて出發せしむ

(三) 城之助兼て期したるとなれば弓鉄砲組五十餘人をして里民を集
めて城の四方に柵を結ひ大木を伐り倒して逆茂木となし守備を
嚴にして敵の來るを待つ千種勢直に城を圍み銃を放ちて之を攻
む城之助士卒を部署して禦かしむ然るに城中には武人は僅少に
して餘は多く農民なれば暮に紛れて多くは逃遁し残れるは僅に
譜第の家隸十四人のみとなれり

(四) 城之助大に奮慨し到底其免るへからざるを知り左右に十四人を
伴ひ暗夜に乗して門を開き敵中に突入し奮戦力闘す千種勢披靡
す城之助己に九人を失ひ僅に五人を存す今は死すへき時なりと
雖も一旦恥を忍ひて免れ以て他日報復の日を待たんと主従袂を
分ちて逃れ去る天明け千種勢先を争ひ城中に入りしかども寂と

して人影なし依て其城に火し凱陣す潤田音羽是より千種家の有
となる

北勢軍記に曰く 永祿四年八月 此記事を永祿元年とあり又弘治年中とせるあり

(一) 潤田音羽(三重郡)の領主を大久保城之助と云ひける先祖より二ヶ
邑の地頭として近邊なれども敢て千種家にも従はず之に依りて
千種常陸介意恨に思ひ使者を以て申しけるは我江洲佐々木左京
大夫義賢と親しくなり此權勢を以て北伊勢を靡けんと欲す然れ
は城之助も我幕下に屬し軍忠を勵まし武功あるに於ては深く恩
賞を行ふへしと云ひつかわしける

(二) 使者宇留田に越き此由を演へければ城之助大に腹立して我代々
潤田音羽二ヶ村の地頭にして國司の幕下に従わす何る只今千種
の下知に従わんやとて使者に一應の返答にも及はず様々悪口し
たりける使者返りて此由を申しければ常陸介大に怒り悪き城之
助か悪口かな急き誅伐すへしとて家臣水谷平左衛門尉に二百餘

騎の軍兵を指し副へ潤田へ差し向けらる

(三) 城之助兼て千種より寄るへしと思ひ地下人を集め我館の四方に
柵を結び鹿垣杯を拵へ千種勢を待ちける處に按の如く永祿四年
八月十三日千種勢雲霞の如く押し寄せ四方より取りこめ早鉄砲
を放ちける館内の者ども諸士少なく皆地下人なり故に防くに及
はず鉄砲の音を聞くや否や鹿垣を破り柵を越ね後の山へ逃げ散
りける城之助今は爲ん方なく偏に討死と思ひ定め残る家の子ま
ても爰を最後と覺悟して面に出て身命を捨て防ぎける故敵左右
なく責め入ること能はずして徒に日を暮しける

(四) 夜に入りて城之助心に思ひけるは是非此所にて討死すへきと思
ひ定めけれども夫れ死は一心の内に安く生は百慮の外に全なれ
は一先此所を立ち退き命を全くし何方にても身を蔭し時節を待
ちて此恥を雲くへしと思ひ潜に夜に紛れ我館を出て何方ともな
く落失せける夜明ければ水谷太郎衛門門内に込み入りけれども
防く兵もなく城之助自害をやしけん又落ちけるにや見ねざる故

館に火をかけ千種に歸陣しける夫より音羽潤田二ヶ村千種の領地と爲りける

勢陽軍記道誓抄に曰く

夫より大久保城之助西國に漂泊しけるか安居成り難ければ又々其後潤田へ歸り居住しける爰に永祿六年千種忠治は音羽山へ遊引しけるか城下に歸りし處養子太郎左衛門忠基家臣を一味に従へ門戸を閉ちて城中に入れず之に依りて忠治は力なくして潤田へ行て城之助を召し申されけるは先非を改め我に順ふに於ては千種を亡ぼし我前の如く千種の城主とならば御邊に音羽潤田を永代施行ふへしと申されければ城之助も早速承引し終に忠治の爲に知謀斗略を巡らす之に依りて忠基滅亡し忠治二度千種の城主と成り玉ひければ大久保城之助も元の地頭と相成り潤田の城主に再勤すると云ふ

北勢軍記に曰く

(一) されは千種は六角家の下知に逢ふ所に永祿六年二月後藤但馬守

嫡子又三郎武威に誇りて義賢の下知に逆ふ同三月十五日種村大藏介(大夫とも云ふ)と建部采女佐に下知して後藤父子の登城をためらひ討取ける後藤か一式家の子此由を聞て口惜しく思ひ觀音城の二の丸に但馬守屋敷有りけるに火をかけ本丸差して切て入り中にも後藤次郎左衛門は名を得たる剛の者なれば速にかけ入り生死を知らず戦ひける之によりて城中危く見わける所に折節蒲生左兵衛大夫義秀(北伊勢軍記賢秀に作る)城に居合せけるか此形勢を見て槍たつとり突て出て討てかゝり敵を追ひ崩し佐々木左京大夫義賢嫡子左衛門督義彌父子共に同道して我居城日野莊音羽へ退き給ひ其後賢秀の親父下野入道快幹軒と心を合せ終に後藤一家を亡ぼし義賢父子觀音寺城に移り終ふ此により勢洲千種とも義絶す

(二)

去る程に千種常陸介嫡子に家督を譲らんと思ふ所に實子三人まで出生す之に代りて常陸介心替りして忠基を蔑にし我子に家を繼かせんと常々思慮を巡らしければ家中も養子たりと雖も嫡

子なり其上六角家なれば義賢の思召も恐ろしく思ふ故同心する者一人もなしさるによりて常陸介無念なから月日を送りける或時常陸介花見る爲め中春の頃三人の男子を連れ音羽山に出て、逍遙し終日酒宴し漸く黄昏歸城せられける所に忠基俄に心替りして家臣共に申し合せ大手の門を堅め常陸介を城中へ入れず忠治大に腹立し門をたゞき悪口し罵りけれども耳にも聞入れず門を開かぬ故力及はすして潤田へ歸る

(三)

拆節大久保城之助西國に漂泊しけるか安堵なし難き故古郷なれば潤田へ飯居しける故忠治呼出し申しけるは先非を改め我に順ふに於ては千種を亡ほし我前の如く千種の城主と爲らは御邊に音羽潤田を永代宛て行ふへしと申しければ城之助領掌しけり忠治喜悅し給ひて然らば御邊江洲へ赴き此義賢公に訴へ近江勢を以て急に城を攻むへしと既に幸江洲觀音寺の城にも太郎左衛門か兄但馬守も義賢か意に逆ひ種村建部に討れたりと聞きて好き折柄なり依て此意恨に忠基北勢の諸士を催ふし近江へ發向せ

(四)

んと欲する處を養父常陸介種々に諫言しけるを金言却て耳に逆ふとかや結句害を起し候はんと常陸介を追ひ出し候急に御退治なくは御大事に及はんと申し遣わしける
城之助近江に赴き義賢に對面し右の委細を申し遣わしければ左京大夫大に驚き急に討手を遣わすへしとて即近江勢を催ふし嫡子左衛門督義弼を大將として其勢都合五千餘騎千種越より勢洲へ發向す斯くて太郎左衛門忠基は六角家より攻來る由を聞き北勢の諸士を催しけれども催促に従ふ者一人もなし剩へ萱生城主春日部大膳星川城主若狹守と心を合せ五百餘騎軍兵を率し潤田音羽に陣を取り常陸介を大將として既に近江勢より先に寄せんとはけみける

(五)

爰に又御館山藥王寺邊に山本豊前守と云ふ者あり忠基使者を以て味方に頼みけれども忠基の養父忠治の不孝普代相傳の恩主佐々木への不忠の罪を演へて中々味方に與せさりける忠基は與力する武士なく催促に應ずる地下人さへ下知に背きて一人も來ら

す大人も小人も運の傾ふく程見苦しかりし事はなし敵は急に寄する故に御内外様の者とも唯忙然としてあきれたる斗にて勇む氣色は更になし手足を握りて居たりけれされとも家臣萩原水谷等大手の門を堅め上下百餘人福に討死と思ひ定め寄せたる敵を待ち居たり

去る程に左衛門督義弼五千餘騎の兵を引率し勢洲に來り千種城に押し寄せ時の聲を上げ矢合の鉄砲を打ちかけ城内には百餘人の者とも敵の大勢を見て勝つへき軍にあらず只討死せんと云ふ儘に大手の門を開き切先並へて切て出て生死を知らず戦ひける流石多勢に不勢の争されは心は武く思へとも百騎の兵とも所々にて残らす討れける忠基は大手にて先馳して戦ひける處に左の眼を鉄砲にて討たれ東西更に見ねさりければ中間に手を引かれ内へ入る日頃馴れたる妾に男子三人あり彼に中間を附け潜に城を出て福村の郷へ落しけるさて忠基は城に火をかけ腹十文字にかき切り火焰の中に飛び込み死しにけり其後義弼は軍散し千種

悉く滅亡しければ貳拾四ヶ村の仕置申附け江洲へ歸り給ひ常陸介再千種の城主と爲る三人の男子は後には信長に屬し所々にて討死しけり

勢陽雜記拾遺に曰く

弘治元年三月近江六角義賢伊勢國を攻め取らんとて小倉三河守に三千餘騎を相副へ千種の城を攻めける千草家武威をはけまし防ぎ戦ふ之に依りて久しく對陣す此時に近江衆伊勢の千草の城攻のよりほひ今様の唄に作りて歌ふことあり斯て勝負も見ねさりける程に双方和睦す

さて千草家法名ト齋男子なき故六角家の執權後藤但馬守の舍弟を養子として千草三郎左衛門尉と稱す(後美濃堅井城の加勢に討死す)此故に宇野部加用も悉く六角家に從ひける其後ト齋に實子出來し千草又三郎と號すいかにもして實子に家督を嗣かせたく思ひ常に思慮を巡らし侍る程に中に思あれば必外に顯はるゝ事なれば養子三郎左衛門尉此心根を推量してト齋父子寺方村と云

ふ所へ遊行の跡にて城の本戸をさしこみ父子を遣ひ出し侍る故に力なく川北村と云へる所へ立ち退き舊功の家來を少々集め千草を攻め侍りしかとも城中堅固に防きしかは無勢にて逆も本意を遂げ難く思ひ江洲へ立ち越えて六角を頼み浪人し侍へり其後瀧川一益長島居城の頃北勢の諸侍大方瀧川に屬せし折節千草又三郎も瀧川に隨ひしか瀧川やかて梅津千草を長島へ呼ひ寄せ切腹させけり是は江洲佐々木に同心のものなり親ト齋は禪門して隠居の身なれば其の難を遁れ甲斐あき命助かり伊賀國へ行き年月を送り其の後信長公死去在りて信雄公長島へ入城の時ト齋を召し出され千草村を安堵せしめ給ひ富田信濃守か甥を養子にして信雄公へ奉公させ侍りしか信雄公も流浪し給ひければ又秀頼公に仕へ音羽村にて六百石を領知して大坂籠城の砌り戦死すと云ふ

勢陽軍記に曰く

弘治元年三月近國の佐々木左京大夫源義賢其臣小倉三河守に命

して三千の兵を率ひしめ伊勢を略して千種忠房を伐つ勝敗決をせずして和親を結ひ其臣後藤但馬守基勝弟某を養子として三郎左衛門と稱せしむ三郎左衛門は後藤兵衛尉實基の後胤にして播磨住人後藤三郎左衛門基明の嫡孫六角家第一の從臣なり此時千種家六角家に屬すれば北勢一体は近江佐々木の臣從たるか如き觀あり其後千種忠房又三郎と稱せる男子を生みたるにより密に養子を出して又三郎をして其後を嗣かしめんとしたるに三郎左衛門之を知り父子の獵に行きたるを機として門を閉ちて之を納れず遂に父子を放逐せり忠房已むを得ず本郡河北村に塾居し後近江に至り六角氏に寄食せり瀧川一益長島に居城せる時忠房一益に屬して長島に居りしか一益佐々木の怒を恐れ其子又三郎を殺す忠房難を避けて伊賀に逃る織田信雄長島に居城の時忠房を召して千種城を興ふ忠房富田信濃守の甥某を嗣子とし信雄流落の後秀吉に従ひ本郡音羽村にて六百石の地を領す元和元年五月五日大坂役に戦死して千種家系爰に斷絶す

按ずる諸書皆大同小異なりと雖北勢軍記の記す所尤精し而して又異説多し北畠物語勢陽雜記拾遺勢陽軍記には後藤但馬守の弟千種家に聲入して三郎左衛門と稱すとせるに北伊勢軍記は之を太郎左衛門と爲せり勢陽雜記拾遺勢陽軍記には三郎左衛門の身追出されて浪人となるとせるに北伊勢軍記は大久保城之助と計りて六角氏に頼り千種城を陥れ再城主となると北伊勢軍記には千種城主を常陸介忠治となし雜記拾遺には卜齋と號を書し勢陽軍記には忠房となす又雜記拾遺勢陽軍記には千種城主卜齋の實子を又三郎とせるに北勢軍記には後藤但馬守の子を又三郎と稱せり未だ何れか是なるを知らず

千種春日部の戦役

伊勢軍談に曰く

(一) 千種常陸介忠治は近江の六角氏と和親を結ひたる以來其勢威益盛にして愾驕の情自ら北勢の小城を併呑せんことを計る爰に舊朝明郡萱生の城主春日部大膳亮俊泰は數世相續て武勇の名高く勢

威頗る盛にして朝明員辨の諸士多く其下に屬す忠治以爲らく先づ萱生の城を抜かは其餘は及に血ぬらすして降伏すへし因て五百八十餘人を分ちて二軍と爲し大手の大將は荻澤備前守に命し三百餘人を以て向川島明神の宮殿を焼き拂ひて其跡に陣せしめ搦手の大將は藤掛平馬助二百八十餘人にて戸津川原に陣せしめ俊家因て近邑の諸士を召す繩生城領主栗田監物小山領主高井民部少輔廣永領主横瀬勝五郎同修理山庄領主海老名藤七郎別所領主後藤彌五郎糠田領主後藤太郎左衛門桑部領主毛利兵庫亮金井領主松岡彦之進長深領主富永筑後守東方領主渡部掃除頭保々城主保々備前守同大助など募りに應し其勢合せて四百餘人なり抑萱生城は山に據りて築きたれば其要害堅固なるか上に尙一層の防備なしたれば容易に陥るへからず荻澤備前守已に間近く城の西北に進み來りたるも容易に上るへからざれば空しく空を眺めて居りたる際城上より大木大石を投げ下したれば先鋒に進みたる兵は大半身体を碎摧せられて死せり城兵次て銃弓を亂發す荻

澤勢多く伐たれて引退く

(四) 藤掛平馬助は勢を勵まし逆茂木を越わて進みたるか守將横瀬勝五郎渡邊掃除頭高井民部少輔敵の近づくを見て銃を發す千種勢又之に應し勢鋭く奮進し遂に柵を越わて躍り入り短兵を以て接戦す格闘概一時間にして兩軍各死者百餘人傷者又多し城兵戰疲れて城中に退く藤掛も又戸津河原へ退く

(五) 此後千種勢は向城を築きて守りたれば城中にても只堅固に籠城して双方互に空しく日を送るのみ然るに南勢の長野左衛門尉祐治は家臣三宅等か嘗て濱田の戦に敗れたるを怨恨し大軍を發して北勢へ侵入し先年の恥辱を雪かんと欲し居たるに近江の六角氏の大軍を發して伊勢を取らんと欲し家臣小倉三河守をして之を率ひしめ千種は六角氏の幕下として今萱生城を包圍せるを聞くに及びては最早躊躇すへきにあらずと多氣に行きて其狀を報し國司に援兵を乞へり

(六) 具敷之を聞きて曰く我家伊勢の國司として此國の政務を執り敷

代に及へり然るに遠境に於ては多く我命を用ゐす今度六角氏の侵入により苟も伊勢の者として此か與力を致すとは意想外の曲事たるなり急に千種を誅罰すへし軍勢は如何にも遣はさんと云ひければ祐治大に喜ひて長野に馳せ歸り出軍の準備をなせり關家神戸家諜して之を知り峯國府鹿伏兎と合し先づ先んして長野を攻めんとす

(七) 祐治又此を聞き北勢出軍の舉を暫く措き只居城の守備を嚴にして敵を待てり千種常陸介は萱生の役久しく事平かざるを以て自ら出陣せんとせしか長野祐治の北勢に進發せんとせる由を聞き大に驚き急に萬招院の僧南果をして無條件にて講和を結ひ共に長野を拒くへき趣を通せしむ俊家又戦に倦み爰に和を調へり因て荻澤備前守は城中に入りて謝禮し藤掛と共に軍を引ききて千種へ歸れり常陸介は愈北方の諸士と交を厚くし和親を堅めむか爲め己の最愛の女を俊家に嫁し結婚の儀を結へり是より兩家互に交り親しみ北勢暫らく靜謐に歸せり

萱生の城主春日部左衛門亮俊家とて代々武勇の家にして近邑諸士其下知に順へり然る處に千種忠治は北勢を攻め靡かし南方に赴き國司をも亡さんと企てける故先手合に萱生を攻むへしとて家臣荻澤備前守を大將として宗徒の諸士十七人都合其勢五百餘騎三重郡千種を出て朝明郡萱生城へ發行せり頃は永祿四年なり左衛門亮俊家は兼て千種より押し寄する由を聞き近邊の諸士を集め本城に固めける

此城の要害は北は朝明の大河なり下をせき上げ湛へたれば城の邊は恰も湖水の如く滿々たり西南は險阻なれば中々馬通り得難し僅に東一方は平なれども兩方は深田なり面もふらす一騎打の細道なり此處に柵を結び堀をほり朝明の河水を流し入れけり本城は山の頂上にて切岸の屏風を立つるか如し然れば寄手たとひ何萬騎にて寄せたりとも容易に落ち得へしとは見ねさりけり

去る程に千種勢は東平津川原に陣を取り山城の細道より寄せける搦手は川を越し川島の社堂に放火し陣を取り山城の細道に鉄砲を放ちける東の手をば廣永城主横世勝五郎高井民部少輔渡邊掃除など堅めける寄手も左右なく責め寄らす堀を隔て柵を隔て唯鉄砲を打かけ遠矢軍にて實の勝負は一度もなく徒に日數を送りける然る所に國司此由を聞き給ふ故北畠友教卿にも北勢の騒動狼籍を鎮めんか爲に軍兵を集め給ふ由俄に風聞あり常陸介聞て大に驚き北勢の諸士と交を深くし昵を深切にし互に心を合せ國司勢を拒くへしと思按し其段萱生の方へ申し遣はし軍を止めにけり

さて麻生田萬笑院南果和尚を潜に頼み和談すへき由申し遣しけるに和尚許諾して城中に赴き免角演説して扱ひ玉ひにける故に左衛門佐も得心して兩方和睦して軍止みにけるさて荻澤備前守城中へ入り左衛門亮に謁し懇懇に禮謝して千種へ歸りけりさて常陸介彌々北勢の諸士と交を深くせん爲に我最愛の息女を萱生

へ遣わし左衛門佐と夫妻となし婚姻の禮嚴重に執り行ひ夫より
萱生千種両家交り深く水魚の思を爲しける

六角と神戸との戦役

五鈴遺響に曰く

柿城柿村にあり弘治年中沼木三河入道宗任住せり神戸城織田信
孝の與力なり弘治三丁巳年三月近江國佐々木六角義賢家臣小倉
三河守に命して柿城を伐たしむ雄鎮堅固にして江軍更に利なし
故に謀略を以て和睦して三重郡千草勢と共に河曲郡神戸の屬岸
岡城を伐たんと稱して三河入道を掠出し其留守の間放火して柿
城を奪へりと

異本伊勢軍記に曰く

弘治三年春佐々木六角源資秀其臣小倉三河守に命して三重郡千
草城を伐つ又神戸與力柿城を攻む神戸下總守一千餘騎を率して
同二十八日柿城を援く下總守か長臣岸岡の城主佐藤中務亟同男
又三郎父子神戸に反きて神戸城を奪ひ小倉三河守を住ましむ其
時佐藤の臣古市與助佐藤に叛きて岸岡城を攻伐す神戸と同心し

て長野の工藤家を催ふして俱に小倉三河守か居城たる神戸城を
撃つ小倉利を失ひ千草家敗走す下總守怒りて佐藤父子を河曲郡
十曲に潜居せるを虜にして許容すと稱して神戸城に伴ひ之を誅
す其死骸を薦に藹みて三日市場に棄けり

五鈴遺響に曰く

鬼神岡城趾岸岡鬼神岡にあり關東の士佐藤中務少輔城を築て此
に居る神戸氏に屬す弘治三年近江佐々木義賢の臣小倉三河守朝
明郡柿城を攻む神戸利盛往て之を救ふ中務及其子の又三郎叛を
謀り虚に乗し近江の兵を導き神戸城を取る中務の臣古市與助又
叛て神戸氏に應し關一黨の兵を誘ひ大に小倉の兵を敗る利盛中
務父子を誅す城遂に神戸氏の有となる天正中神戸氏滅ふるに及
んて城廢す

伊勢國司傳記に曰く

弘治年中近江國六角左京大夫源義賢伊勢を打取へきとて小倉三
河守に三千の兵を相副へ先千種を城む千種服従の後宇野部蘆生

以下をしたかへる此時神戸の與力梯城を攻む弘治三年神戸下總守後卷に出て神戸の長鬼神岡城主佐藤中務亟父子謀叛して神戸の城を取り小倉を引き込ませ亦佐藤か長臣古市與助佐藤に叛き鬼神岡の城を取り神戸家を引入る爰に於て關家一味同心して神戸の城を攻め小倉を追出し佐藤か首を刎るは大亂なり

北畠物語に曰く

- (一) 弘治三年三月江洲の軍勢三重郡柿の城を攻む此柿は神戸方と一味なる者なれば神戸下總守一千餘騎を引具し同二十八日柿城の後詰す其夜神戸の家人鬼神岡の城主佐藤中務亟父子謀反を企て一族若侍百人を催ふし小倉と心を合せ遂に神戸の城を取りて小倉を引入れ城を守る神戸常々歸一を顯みす諸事の無用心故災來ること斯の如し既に度に迷ふ所に佐藤か家人古市與助と云ふ者主人に叛き神戸と一味して鬼神岡の城を取り又神戸家を引き入る神戸大に悦ひ智謀を廻らして小倉を討たんと欲す
- (二) 近頃神戸關不快故神戸今度の助力を關家に頼むこと能はず長野

家に便りて加勢を乞ふ長野やかて同意し工藤勢を召具して鬼神岡に走せ來る神戸家長野勢を合せて直に神戸の城に取り掛る小倉三河守粉骨を盡し防ぎ戦ふと雖寄手勇み進んで諸方より責め入るによりて味方の軍勢利を失ひ開城して千種に引き退く神戸進んで悉く敵の輩を追討し再び本城に入りて會稽の恥を雪く

(三) 夫主君に敵する者は天罰を逃れずして終に身を亡ぼす爰に佐藤父子十宮に隠れ居たりしか神戸家より赦免と稱して呼ひ寄せ直に登城の時路次に人を附け置き速に佐藤父子を誅し其死骸を薦に巻きて三日市場に捨て置く然る處に佐藤か召し使ひし一人來りて件の死骸を見怒りて之を蹴たりと云ふ

伊勢軍談に曰く

(一) 柿城陥落

(イ) 弘治三年丁巳近江の六角氏再伊勢を併呑せんか爲め小倉三河守をして三千餘人を率ひて侵入し千種家の伊藤伊右衛門山本

縫殿介を以て郷導とし先づ神戸の與力柿城主沼木入道宗喜を
 攻む柿城は其地狭小にして其守兵僅に六十三人のみ六角勢已に
 直に之を圍む宗喜慨然として曰く衆寡素より敵すへからす已
 に網の魚に似たる境遇に陥りたれば今は皆自殺すへきなりと
 家臣荒木三左衛門進みて曰く已に死を決せし以上は何か恐る
 とあらんや一人なりとも敵を斃すところ武士の面目なれと
 (ロ) 此に於て三左衛門自ら六十人を率ひて各自刃を翳して敵中に
 突入す敵兵披靡す城兵縱橫亂擊接戰最も劇し其疲るゝに及ん
 て一先づ城内に歸り其人數を点檢せしに荒木を始として四十
 二人を失ひ僅に主従二十餘人を餘す宗喜今は是迄なりと持佛
 堂に入りて自刃す年六十一其兵皆火を放ちて自殺す近江勢は
 已に柿城を陥れ此に暫く山麓に休息す

(二) 神戸城の陥落

(イ) 小倉三河守已に柿城を陥れ沼木氏と亡ほし勢に乗して神戸城
 に向ふ神戸城主友盛大に兵を集めて守備を嚴にす近江軍之を

圍みて城を攻む城兵櫓上或は屏間より弓銃を亂發して多く敵
 を斃せり然るに友盛の郎從中山紀伊守三宅權右衛門高山玄蕃
 助の三人其心を變し近江軍に内通せり

(ロ) 三人使をして小倉に言はしめて曰く明日の戦には城兵は表門
 より打ち出つへし其期を誤らす城内へ進入すへし余輩三人内
 通して必藏人の首級を貴覽に供せんと小倉大に喜ひ城下の人
 家を破壊して堀を埋め城兵の突出せるを期として直に門前に
 攻め向ふ彼三人は之を禦くの様をして門を開て小倉を導く此
 に於て近江勢三千餘騎直ちに城内に入るを得たり

(ハ) 友盛之を見て大に驚き自ら牙城より出て堀田監物白木左右衛
 門伊藤源内古市左内鈴木兵馬介立木右衛門其餘野村川村國府
 服部を始として三千餘人悉く一隊となり敵中に奮衝す敵兵態
 と門を出て引退りきけは城兵急に追て堀邊に戦ふ折中山三宅
 高山三人は其勢百五十騎にて城内に時の聲を發す近江軍機に
 乗し取て返し神戸勢中に突入す城兵前後より夾撃せられて如

何ともする能はず堀内伊藤立木を始として暫くの間に兵の多
數を失ひ己むを得ず殘兵を率ひて岸岡の城に引退く

(三) 神戸勢神戸城を復す

(イ) 小倉三河守は己に神戸城を取り降將三人を賞し敵の返り撃に
備へ殿に防禦の術を講せり神戸具盛は岸岡に至り直に使者を
以て神戸城の陥落三人の反逆の由を峯關國府の一族に通し援
兵を乞ひければ三人は神戸の親族の間なるにより直に援兵と
して二千餘人を遣したれば神戸友盛巳の部下の兵と合し再回
復の舉に出てたり

(ロ) 永祿元年丁未二月二日拂曉三千五百騎を分ちて二軍となし東
西より狹みて城を攻めければ城内にも兼て覺悟をなし居たる
事なれば直に之に應戦せり神戸勢は巳に地理に熟したるとな
れば先日の恥を雪かんとて奮戦最力め巳に堀及屏をは乗り越
へ先を争ふて侵入す白木左衛門古平小平太鈴木縫殿助其先
鋒たり

(ハ) 爰に搦手の門に於ては服部伊之助と云へる友盛の士城中の事
情に明なれば潜に屏の水抜の穴より城内に入り敵の情況を見
るに今大手の門には戦正に酣にして當方には一人の敵たもな
し是幸と門を開けは搦手の大將國府佐渡守大に喜ひ千五百餘
騎一齊に城内に入り赤旗を樹上に立て時の聲を擧ぐ城兵驚き
騒ぐを前後より挾撃したれば一戦にも及はずして城を開て千
草に退けり

(ニ) 變節者中山紀伊守は服部伊之助に生擒せられ三宅權右左衛門は
大手の堀邊に於て古市左内と搏して殺され高山玄蕃は行方知れ
すち落ち失せたり友盛巳に城を回復し大に勝利の祝宴を張り紀
伊守をは岸岡にて斬り權右衛門の首と共に梟首せり

神風記に曰く

神戸下總守一千餘衆を率ひて柿城の後巻に行きしに下總の家臣鬼神岡城主佐藤中務父子謀反し三月二十八日夜神戸の城を襲ひ取り主君の妻子一族を逐ひ出し小倉三河守を引入んと相待ちける下總守は度に迷て居たる所に佐藤か家老古市與助佐藤に背き鬼神岡の城を取て下總守を邀へ入れける小倉三河守已に神戸に入りけるか關家一黨神戸に加勢しければ小倉叶わすして神戸城を落ち失せけり佐藤父子は十宮に隠れたりしか遂に捕われて誅に伏せり

伊勢軍記に曰く

(一) 弘治三年丁巳春三月近江の勢三重郡柿城を攻む此柿城は神戸家の一味なり是によりて神戸下總守一千餘の兵を卒ひて同二十八日柿城の後巻を爲す其夜神戸家の長者鬼神岡の城主佐藤中務父子密かに謀叛を企て一族の若黨數百人を催ふし小倉と心を合せ遂に神戸城を執り主君の妻子を追ひ出し一族小倉三河守を引き入れて城を守る神戸家用心なきにより禍來ること此の如し既に度に迷ふの處佐藤の長者古市與助なるもの佐藤方に背きて逆

心を企て鬼神岡城を執りて神戸家に引き入れて之を守る此に於て神戸家謀を廻らし小倉家を伐たんと欲す

(二) 近代神戸關一黨と不快なるによりて之に頼ること能はず則長野家に加勢を請ふ長野輝伯同心して工藤勢を率ひて鬼子岡に馳せ來る神戸家並に長野勢戸神城に推し寄せ案内を知りたれば追手搦手より之を攻む小倉三河守防戦すと雖も神戸勢勇力を勵まし諸方に攻め入る小倉家合戦利を失ひ城を開きて千草に引き退く神戸家悉く之を追討し再當城に入り會稽を恥を雪く夫主君を怨むる者は天罰を免れず

(三) 爰に神戸家赦免と稱して之を招く佐藤方登城の時人を其路次に伏せ遂に之を謀伐す佐藤の子息又十宮に於て之を討つ其死骸を薦に巻きて之を三日市に捨つ然れども佐藤の下人たる者其死骸を見て怒りて曰く汝無道にして君に背き又罪なくして我を惡む看よ、端的に其罰を蒙ると足を以て二三之を踏む此下人忽ちに脚氣を病み一生足起たすして食を乞ふと

(四) 古語に曰く運は天にありと死は定まる敵に向ふも退くこと勿れと其後小倉三洲江洲市原の出湯に於て一搔等と喧嘩に及び遂に士民の爲に誅せられ畢りぬ思はず勢洲に大事に逃れ士民の手に懸りて命を失ふ誠に因果歴前の理なり夫人喧嘩を致し命を失へる者は人を侮る所以なり勇を勵まし氣怒る人は大兵に非ず和を用ゐる者は名を失はざるなり故に曰く強き人は我を怒らせは則之と和し敵懈らは則之を誅すへし彼小倉家亦人を侮りて城を發せる故に名を失ふ者なり他小倉三河守は江洲佐久良の城主小倉兵庫助の子息にして幕の紋は五梅なり其頃小倉家六角家の一味となり武勇の故に勢洲の大將に任せらる

關神戸兩黨戰

北伊勢軍記に曰く (茂福城合戰)

(一) 茂福城主(三重郡)掃除介平盈豊は先城主朝倉下總守盈盛の嫡子なり此祖先を尋ぬるに餘吾將軍平維茂の末葉なり城野鬼九郎介國か嫡子城野太郎介永か後胤なり元弘建武の合戰に尊氏將軍の御

味方仕り軍功あるによりて伊勢國に領地を賜はり茂福に居城せり然るに羽津城主赤堀右京大夫國虎は關安藝入道萬鎮と一家なれば其幕下に從へり此時盈豊神戸藏人友盛の下知に從ふ之に依りて茂福家と赤堀國虎と合戰に及ふことなり

(二) 永祿二年關萬鎮入道北勢を靡けんか爲に白子左衛門佐に五百騎の軍兵を指し添へ先赤堀に來り勢揃ひして既に北勢へ寄せんとする處に赤堀國虎此由を聞き家臣森長松岩田縫殿右衛門杯集め申しけるは我關の與力として赤堀と同家なり然る所に今度白子鹿伏兎の諸軍北勢へ入るならば神戸與力の小城北畠幕下の者までも皆落城せんは必定なり我一城をも攻めず白子左衛門鹿伏兎豊前守の後陣にあらんも口惜しく其上萬鎮も云ひ甲斐なく思ひ給わんいさ近邊なれば今夜の内に勢を集め未明に茂福へ押し寄せ白子鹿伏兎勢の近づく内に茂福を乗り取らんと申しける諸臣何れも此に同じ終夜諸士を集め未明に茂福へ押し寄せける

(三) 羽津の間僅に十町斗り隔たりたれば兼て羽津より寄と覺悟して

宮田城主南部治部少輔と打合せ其外萱生柿を加勢として大勢にて籠りたれば國虎押寄せたれとも既に騒く氣色もなく足輕を出し鎧砲を打ちける寄手も大勢籠りたる体を見て案に相違して急に責むること能はずして堀を隔て、互に鎧砲を放ち徒に時を移しける

(四)

去程に白子左衛門亮鹿伏兎豊前守は赤堀の城にて茂福合戦の由を聞き國虎に力を合せんか爲め楠赤堀中川原堀木の勢をは馳け催ふし都合其勢一千五百餘騎茂福の城へ押し寄せする國虎力を得短兵急にひしかんと堀を乗り越し城中へ切り入らんと無二無三に進みける城内にも小川官右衛門宗春林玄證光定田中正濟日置八郎多々木太郎左衛門人見是正大手の門を開き諸勢を勵まし爰を専途と防きける互に打ち合ふ鎧砲の音時の聲凄ましく聞けける故に掃除介力を合せんか爲に自ら三百餘騎の勢を引具して北村の在家より天王林の後を通り鴈の前より筋違に白子勢の後へ廻り鯨波を揚げ扱つれて討てかゝる

左衛門佐豊前守思ふ様に寄ることならず取て返し戦はんとするとも兩方は深田なり先廣みへ出て、戦へと云ふ程ころあれ後より下崩れに崩れたれば二人の大將も落ち行く勢と諸共に心ならずも幣野まで引にけり南部中務少輔も少勢たる故あとも慕わす諸勢を宮田の城へそ引入れる斯る所へ神戸藏人友盛關家より茂福を責むると聞き助力を合せんか爲に二千餘騎の軍兵を兵船八十艘に取り乗り長太若松の浦より船を出し須臾の間に茂福富田浦につき船より上るや否や敵の謀を見て二千餘騎の兵深泥も厭はず眞一文字に進み寄す

城中には力を得て大勢木戸口を開て切て出れば國虎大手へ寄せたれとも屏の一重をも破らすして見てあれば引やと思ふ所に城中より急に馳け出るを見て面に立ちたる者は切合ひけるか後に扣へたる者共は下崩れに引ける國虎心は剛に思へとも落行勢と諸共に虎口を退き羽津城へり引入りける

扱白子左衛門鹿伏兎豊前守は南部治部少輔頼武に追ひ立てられ

幣か野に野陣取り居ける處に神戸勢勇氣を勵まし進み來る城中の者共も城を出て神戸勢の後へ進み富田勢三百餘騎是も轡を並へて馳け出ける左衛門介豊前守前後の敵の勇銳に氣を吞まれ赤堀の城へ引きにけり神戸勢逃る敵の首少々討ち取りて茂福の城へ入り人數少々残し置き藏人大夫友盛船にて神戸へ歸陣しけり

伊勢軍記に曰く

川曲郡神戸城主を神戸藏人大夫平友盛と號す彼か祖先は關次郎左衛門盛綱六世の孫長崎四郎盛眞後入道して伯岩と號す元弘二年五月高時滅亡の節戰場をのかれ勢洲に來り元來關家と一家爲るか故に神戸に住し本名を改めて神戸治部少輔と號す其後足利の幕下となり勳功ある故に川曲郡二十五ヶ村を押領す代々武勇を輝しける

勢陽雜記に曰く

神戸友盛は中興關家より分れたるか關が四郎の嫡子神戸家に來り相續して一族繁昌しける關四郎嫡子法名柏嚴五世神戸下總守

と云ふ北島教具の婿なり神戸藏人具盛は初四郎法名樂三〇は北島政具の末子なり幼少の時相國寺の僞食にて有りしか神戸下總守に子なきによりて養子となり神戸四郎具盛と號す文武の達人なり一族嫉みけり仁義を以て家道を治むる故に其德に畏伏す其次を悦岩と稱す其子神戸下總守初は太郎四郎と云ふ法名涼岩其次は神戸藏人友盛と云ふ涼岩永祿の始め死す子なきによりて友盛家督を嗣ぐと云へり始めは土師の善福寺に住せり其外樂三の次男は赤堀家の養子なり楠家は樂三の婿なり長野家は北島教具の甥なる故北勢にて武威を振ふと云ふ此故に雲林院表にて關下野守數度合戦を挑みしか神戸悦岩楠赤堀皆關方の一族にて加勢しける

兵亂記に曰く

神戸下總守は關の一黨なり天文年中に築城す

伊勢軍記に曰く

(一) 伊勢國司多藝御所北島大納言材親卿權勢あり所謂北伊勢神戸柏

岡五世の孫神戸飛彈守は前國司政具卿の鐙と爲る之に依りて神戸長野の兩家國司の一味と爲る然れども神戸家に女子ありて男子なし故に材親卿の子息を以て養子鐙と爲す此子息は元相國寺の喝食たり後柏原院の御宇永正の中比神戸の養子となり神戸四郎具盛と號し後神戸藏人に任す文武の達人なり

(二) 一黨之を嫉み並に家中の諸侍之に逆意す然りと雖仁義を以て能く家を治め殊に南方の一派なり長野の昵近なり故に能く其家を保つ天文の中頃入道して法名を神戸樂三と號し北方に威を逞ふす次男を以て赤堀家の養子と爲し並に楠家を以て鐙と爲す故に彼兩家神戸と一味す是によりて暫く國司家長野神戸濱田楠赤堀稻生等と一味す

長野と北畠との戦役

勢陽雜記に曰く 葉野

(一) 天文年中北畠中納言具教卿武威を振ひ勢南の軍兵一千餘騎を催ふし山崎左馬介を大將として長野家を襲ひ來るの由聞わしかは

(二) 工藤方より細野九郎右衛門尉分部與三左衛門尉を大將として五百餘騎にて馳せ向ひ立木と七栗の間ある葉野に於て挑み戦ひ辰の初より未の終まで百騎か一騎になるまで戦ひける程に敵味方手負死人數を知らず

(三) 養父與三左衛門尉兼て細野に云ひけるは四郎次郎當年十六歳なり軍の様をも見習はせんか爲め具足し侍り御邊心を添へ玉われと細野尤と領承して四郎次郎に云ひけるに我に順ひ何處までも來るへしと云ふ四郎次郎も相心得候とてかけ引き相伴ひ戦ひけるかゝりける所に細野か控へたる陣前へ黒絲威しの甲冑を附けたる大男鎗を提げ二王立ちに立ちて云ひけるは細野殿は日頃武邊者と承はる斯く申す某は物の其數に入るへき程の者にあらねども徳田の裸と申す者なり細野殿と一鎗致し勝負を決すへしと云ふ細野之を聞きて進み出て、云へる様汝裸自慢することなかれ軍の習運によることなり味方は敗軍と見ねたり無益の廣言せんより命を全ふせよと云ひければ裸後を顯みる所を細野三間半の鎗

を以て走りかゝりて突き伏せければ分部四郎次郎續きて押し詰めて首を取らんとしける所に味方走せ來りて云ひけるは與三左衛門尉殿ころ敵の大將山崎と戦ひ討死候と云ふ

(四) 細野も四郎次郎も之を聞くより裸か首を置きて山崎を追ひかけ山崎は分部の首を取り勝時を作り四五十騎許りにて引き取りける細野分部荒木内田頼りに追ひかけ敵も敵によるる只兄弟返し玉へと云へは何となりとも悪口せよと聞きも入れず足早に引き退く細野元より足の早きこと人に勝れたれば程なく追ひ付き大勢の中にかけ入り敵を四方へ追ひ散らす

(五) 山崎大剛の者なれば返し合せ火花を散らし戦ひける細野鎗を取りり伸へ山崎か眞向を突き伏せ既に首を取らんとしける所へ弟四郎次郎走せ來り細野殿兼ての約諾は如何といへは好うころ來りたり其方か親の敵と云ひ初陣なり甲首を取れとて四郎次郎に首を取らせ猶敵を追ひかけ行く與三左衛門か首を取りて歸る者をはやかて突き伏せ首を取り與左衛門か首に取り添へ歸りけり

勢陽軍談に曰く

(一) 天文年中北畠具教山崎左馬介を將として一千餘騎を率ひて長野氏を攻めしむ長野家にては細野九郎右衛門分部與三左衛門をして五百餘人を率ひて戸木七栗の間なる葉野に陣して敵を拒く兩軍殺傷相當る分部四郎次郎時に年十六歳戦陣見習ひとして細野の陣にあり會敵の勇士徳田裸と云と云ふもの自ら名乗りて細野の陣頭に來りて戦を挑む細野之と戦ひ突き斃す四郎次郎進んで其首を取る

(二) 時に山崎左馬介は已に分部三郎右衛門を斬り凱歌を擧げて今や退かんとす細野聞きて切齒し追て敵中に亂入す敵兵四散す山崎返して細野と戦ふ細野鎗を以て山崎の眞頂を突て之を斃す四郎次郎其首を斬る三郎左衛門の首級を携へたる敵又細野の爲に刺され其首を奪ひ還さる

(三) 天文年中長野輝伯を兵を率ひて南勢を経畧せんとす北畠晴具則澤秋山二氏をして之を拒かしむ二氏の勢垂水の鷹山に陣す長野

勢は兵を七隊に分ち各一方に向はしめ分部細野先鋒となり一日中七度戦ふ然れども雌雄決せず長野輝伯其遂に抜くへからざるを思ひ兵を率ひて歸る

(四) 輝伯は長野三郎の弟なり三郎幼より京にありて將軍普廣院に給仕せしむ將軍の寵臣に伊勢守某なる者曾て將軍の蹴鞠の會あり洗足して明衣を乞ひければ長野三郎之か爲に明衣を捧く伊勢守兩足を出たして之を拭ふを命す三郎憤然として大に怒り伊勢守を抜討に切倒し其身も其處に於て自殺す時に年十六歳なり是に於て弟輝伯家を續く

伊勢軍記に曰く

長野輝伯は故の長野家の末子なり彼舍兄長野三郎幼少にして京師の普廣院にあり爾時公方の寵臣伊勢守來る普廣院鞠を蹴て足を洗ひ明衣を請ふ長野三郎之を持ち來る伊勢守足を拭へど謂ふ三郎奇怪者と謂ひ刀を抜きて伊勢守を斬り殺し自害し畢りぬ生年十六なり故に其弟輝伯長野家を嗣きて名將なり諸方に向ひて

戦を挑む天文廿二年勝政十三歳にして之を見物す云々(原本の儘) 長野輝伯工藤勢五千を率ひて南方の界に出つ國司勢澤秋山以下壹萬を打ち出し垂見鷲山に出向ひ合戦を致す工藤勢七備を設け分部細野等一番に攻め蒐る國司十備五行十列を儲け武威を震ひ一日中に七度矢を合すれども勝負を決せずして引き退く長野每度利を得就中河内武者殊に勝れ亦裝束して蒐け來るに面を合す者なし國司方に於ては家木主水佐豊田五郎右衛門尉垂見釋迦房等七度とも抜群の高名を致す是鷲山の合戦なり

伊勢國紀略に曰く

さる程に國司已に領内を従へ給へは北方をも打従へんとて木造家藤方家並に奥山等を以て是を謀らしめ屢田上乙部細野長野等へ發向合戦あり其頃長野源次郎輝伯と聞へしは武道の達人にて後に名を藤定と改め大和守と稱す工藤家の惣領なり天文年中工藤勢を率し南方へ發向して國司と戦ふ工藤勢七備を設けて細野九郎右衛門分部與三左衛門一番に攻めかゝり一日の内に七度鎗

を合せたり勝負決せずして南北に引退きけり長野毎度利を得たる中に河内武者殊にすくれ赤装束して馳せかゝるに面を合す敵なしかくて南方の先手崩れかゝり旗本危き處に小森上野の城主奥山左馬介踏留て敵を突崩し手勢と共に枕を並へて打死す大剛の働き諸人目を驚かせり其頃の謠に小森上野奥山のうち死には雲烟たつといひはやせり扱又國司方家木主水助富田五郎左衛門等も討死せり

伊勢國司傳記に曰く

(二) 小森上野には藤方刑部少輔教賢居城と軍記に有之候かと覺申候此相違にて御座候小森上野城は奥山左馬允居申候天文年中鷲山と申所にて北島晴具と長野氏合戦御座候刻日の中に七度の戦有之由其刻長野方にて分部左京光高戦死晴具御旗本までもさわき申に付奥山左馬允手勢數士踏留まり枕を並てへ討死仕候其節見物の諸人地下人までも小森上野の奥山討死には黒烟立候と申由承候其外國司方に山崎左馬助家所萬五郎等數士討死の由承傳候

左馬允子萬五郎奥山左馬允と名乗小森上野に居城仕具教に仕申其後織田信雄へも奉公仕候左馬允妹は私親又は加留彌右彌衛門母にて御座候故能物語承申候事

(三)

長野氏元祖工藤次郎左衛門高景と軍記には御座候名乗違ひ申候其子細ぼ稻生氏へ義詮公よりの御感狀に於伊勢國致軍忠之由工藤庄司親光所注也尤神妙彌可抽戦功之狀如件觀應三年五月廿五日和田九郎とのへ此工藤庄司親光長野始祖尊氏公より阿濃郡を賜り長野に居住故長野と申候祐經より相傳の小さすかも長野家相傳親光の大刀は細野家へ傳候雲林院氏家家所氏細野氏草生氏分部氏淺香氏皆工藤氏にて御座候名乗の通字には藤を用ひ申候

伊勢軍談に曰く

(甲) 北島と長野との和睦

(一) 北島具教兵威益盛にして其勢隣國に及ふまで振ひければ國內をば悉く統一せんとして先長野の工藤を併せんと欲し木造藤方の二親族及奥山常陸介に命して或は乙部を攻め或は田上を攻

め或は長野と戦亂已む時なし然るに雌雄未だ決せずして爰に於て講和の議起れり時に長野には家を嗣くへき男子なきによりて北畠家より具教の二男を養子として兩家和睦すへきの義双方の間に議熟し此に於て和議調ひ具盛の二子具藤長野家に入婿して長野次郎と稱せり

伊勢軍記に曰く

弘治三年丁巳九月五日帝崩す正親町院踐祚す翌年戊午永祿と號す是後奈良院の太子なり其比伊勢の國司北畠中納言具教卿其武威已に勢和紀伊志の五洲を覆して數郡を幕下に屬し北方工藤と挑戦數年にして之を屬す爰に長野家戦屈して子息なきか故に永祿の始頃國司と和睦に及び具教卿の子息をして養子と爲し長野次郎と號す是によりて工藤家南方と一味す凡國司南は吉野郡を限り北奄藝郡を限り東は志洲を限り西は伊賀を限り諸國十五郡を治め三萬の大將となり志を天下に掛け先北伊勢を謀らんとす

北畠物語に曰く

勢北の關一黨も又猛威を諸郡に震ふ關下野守は雲林院に打出て數度合戦をはけむ神戸悦岩と楠赤堀は一味して北方の諸侍を攻む其外一黨共に武威に慕る之に依りて諸士幕下に屬す然れども關神戸峯三家の一族不快にして互に權威を争ひ度々合戦に及ぶ故未だ出世の大將なし

江洲蒲生下野守定秀連々關神戸の兩家を諫めて永祿の中頃和睦なさしめ六角の一味とす兩人同意によりて一黨峯筑前守國府佐渡守鹿伏兎宮内少輔以下自然に六角家の幕下に屬す但非官の如くにはあらず永祿の中頃和睦なさしめ勢洲の一黨工藤兩家に分れて關は工藤を亡さんとし工藤は關を討たんとする故に兵亂やます或は一黨工藤家を攻め或は工藤家一黨を却かす關家雲林院表に打ち出て合戦數度に及ぶ兩陣互に勝負かわりて落居することなし

關の一黨猛威を振ひ北方龜山並に千草宇野部以下と一味す峯南部加用等同意に依て七郡の内に威を振まい諸侍各幕下に引付く

る中にも關盛信武勇を勵まし桑名に至りて取り鎮め豊田四郎兵衛を以て代官にすへ置く然れども龜山神戸峯の三大將武威を争ひ動もすれば内輪合戦を始めて更に一結すせず
伊勢軍記に曰く

後奈良院の御宇武將足利家衰世の頃天文年中諸國大に亂れ兵革已むことなし近國隣卿悉く戰なり伊勢國司北畠家多氣御所晴具卿は東方志摩國に向ひて之と戰ひ南方は大和國吉野郡宇智郡の澤秋山並に紀伊國熊野山阿曾大内山に向ひて之と戰ひ西方は伊賀國仁木家に向ひて之と戰ひ北方は工藤家に向ひて之と戰ふ
工藤家は南方は國司家に向ひて之と戰ひ西方は伊賀の甲賀に向ひて之と戰ひ北方は關家に向て之と戰ひ又關家は南方は工藤家に向ひて之と戰ひ西方は近江六角家に向ひて之と戰ひ北方は諸侍に向ひて之と戰ひ又北方の諸家は東方は尾張國織田家に向ひて之と戰ひ南方は關家に向ひて之と戰ひ西方は六角家に向ひて之と戰ひ北方は美濃齋藤家に向ひて之と戰ふ

伊勢峯軍記に曰く 明應元年十二月

伊勢國飢饉す是より先き國人長野信貞細野範貞等峰廣成と争戦止ます是に至りて和す

長野と神戸との戦役

伊勢軍記に曰く

(一) 永祿の中頃勢洲の一黨工藤兩方に分れ關は工藤を亡さんと欲し工藤は關家を亡さんと欲す故に兵伐止む隙なく或は一黨工藤家を攻め或は工藤一黨家を攻む關勢雲林院表に打ち出て合戦數度なり工藤勢神戸表に打ち出て合戦數度なり兩雄互に威を振ひ遂に勝負を遂げざる者なり

(二) 夫れ合戦は専ら奇兵を以て不意を撃つに如かす或時工藤衆國司の命を以て北方諸士と同心徹合し一黨を討たんと欲す長野二郎殿並に雲林院出羽守草生家々所家細野九郎左衛門尉分部宗右衛門尉乙部兵庫頭中尾内藏允川北内匠助以下工藤勢五千餘人安漕浦より船に乗り東海に寄せ來る一黨勢五千餘人三重郡塩濱に出て向ひ其勢を伏せ置く工藤勢敵あるを知らず塩濱に於て勇進し

て船を上る處一黨勢同音に時の聲を上げ赤旗を上げて之に攻め懸る工藤勢悉く敗軍し究竟の侍大將數多討死す此時關家の味方神戸藏人の叔父神戸左衛門尉以下討死す

(三)

夫合戦は鋭を避け情り歸るを撃つに如かず或時工藤家國司の命を以て並に南方の諸勢神戸表に發向し勢を分ち神戸の諸家を攻む長野家は工藤勢數千人を催ふして神戸の西城に推し寄す神戸家之を會釋し暮日深く入らんと欲する時闇夜なり工藤勢深く有るを知らず龍光寺の門前を経て勇み進み悉く深く入り迷ひ惑ふ處を神戸勢一千餘人同音に攻め懸り悉く之を討ち取る

(四)

此時南方波瀬御所同與力矢川下野守阿曾彈正忠以下一千餘人赤堀城に推し寄せ之を攻む赤堀城は大剛の者なり一族高官以下の軍兵を集め武威を勵まし防ぎ戦ふ故に波瀬家之を攻め落すこと能はず空して其勢を引き取る其時城中より敵軍に對して落書して云はく

赤堀の堀の深さを知らずして淺みをせゝる波瀬の御所かな

此赤堀家は神戸樂三の子息なり故に神戸家の一味なるによりて之を攻む又或る時長野家國司の命を以て工藤勢を催ふし一黨を攻むる時長野攻め落すこと得ざるを度り又赤堀城を攻む時に城中より敵軍に對して落書して云はく

勢陽軍記に曰く

赤堀の庵の内の三文字に長野の首へを割菱にせん

永祿年中南伊勢長野工藤家より波瀬御所の與力矢野下野守阿曾彈正忠を命して赤堀城を撃たしむ俵の一族防戦すると逞し波瀬勢屈して退陣す城中より嘲り哥を咏して送れり
赤堀のほりの深さを知らずして

淺瀬をせゝる波瀬の御所かな

長野家の士卒を誘りて一首

赤堀の庵の内の三文字に

長野の首を割菱にせん

赤堀の幕の紋は庵の中に三文字を畫く長野は北畠の一族にして

幕の紋割菱なり

又曰く赤堀の一族は朝明郡羽津城に俵右京大夫國虎本郡濱田城に俵美作守朝明郡保々中野俵藤太郎等居住す永祿年中對陣の時和親して神戸具盛の二男を養子として赤堀治部少輔具氏と稱す是より神戸家に屬す

北畠物語に曰く

其後長野工藤家勢を催し赤堀の城を攻む夜に入り城内に乗り入り時の聲を揚ぐ城内あわて、防ぎ戦ふと雖叶はして落城す此に至りて赤堀家斷絶す

五鈴遺響に曰く

赤堀は神戸具盛樂三に屬すに依りて國司北畠愷を發し矛盾に及びて家系滅すと云ふ然れども俵一黨其後織田に屬して天正四年美濃國竹か鼻合戦に舍弟俵美作守と肥前守秀宗も同時に戦死すと云ふ上作の説と異なり考ふへし

勢陽雜記に曰く

當時赤堀家は神戸樂三の次男たるにより神戸家の一味なり永祿の中頃に南勢波瀬御所の與力矢川下野守阿曾彈正已下赤堀の城へ押し寄せ攻め戦ふ赤堀家一族の剛兵武威をはけみ防ぎける程に攻め落すこと叶わすして空しく引退りきければ城中より赤堀の堀の深さを知らしすして

淺みをせゝる波瀬の御所かな

又或時長野勢赤堀を攻めければ敵軍への落書に赤堀の庵の内の三文字に長野の首を割菱にせんと此狂歌は敵味方の幕の紋にてよめるなり

北畠物語に曰く

永祿年中工藤家進み來りて神戸を攻め討つ合戦の半々に南方の波瀬御所同與力矢河下野守阿曾彈正以下赤堀の城に押し寄せ責め動かす赤堀家の一族與力以下の軍勢を集め武威を勵まし防ぎ戦ふ故波瀬方利を失ひ空しく軍勢を引き取る此時城中より敵に對して落書あり

赤堀の深さを知らてはかなくも

六四

淺みをせゝる波瀬の御所かな

此赤堀は神戸家の一味たるを以て之を攻む其後長野工藤勢を催ふし赤堀の城を攻め夜に入りて其近邊に軍勢をふせ置き城内人静まりたる時を窺ひ乗り入り時の聲を上く城内あわて防ぎ戦ふ雖叶わすして落城三間小六佐治廣島一番にかけ入り高名す爰に至りて赤堀家断絶す

伊勢國司傳記に曰く

(五)

赤堀城主は俵藤太秀卿の後胤の由赤堀落城は長野大和守藤定攻取り申候其仕様は宵より兵を赤堀の近邊に忍はせ夜中にひたくと屏に乗候故城中周章候然とも取合戦候由其刻一番に城中へ走入候者には美間小六佐治の廣島二人三間は弓にて敵二人射伏申由長野家其夜の軍法には敵を討取候とも首取こと勿れ討捨に仕候様にと制法を出し被申候其子細は首取候は、はか行申間敷との義也赤堀の隠居に卜月と申八十有餘の翁五房の中に交り御入

候を佐治の廣島此入道は何者うとてひけを取り引立候を小六痛敷存し佐治に申候は左様の老翁を討取候とても高名手柄にも成申間敷候と制し申し候へは佐治も尤もと存捨置先へ行申候彼翁小六に御申候は敵なからもやさしき人にて候何と申と尋被申候故三間小六と申候へは美間七郎は兼て聞及し士なり我は赤堀卜月なりと被申赤堀家重代の太刀鎌倉の山内助真二尺五寸在之を小六に給り候其後卜月も自害の由に候彼太刀織田信包被聞食御望故信包へ差上候後中尾新左衛門へ被下候由承候三間小六父は奥山平兵衛と申奥山常陸介三男にて御座候北畠家長野家と和談の刻足坂の三間七郎方へ養子に参り三間と名乗申候小六母は三間七郎娘にて御座候加様の仕形をば伊勢にては忍取と申候軍記には見わ不申候事

北伊勢軍記に曰く

永祿二年關安藝守盛信は蒲生下野定秀の鯉なり定秀と六角左京大夫義賢とは一味たるの故盛信も六角家に屬せり爰に北畠の與

六五

力工藤右衛門祐治と云ふ者關家を攻めんとて勢を集めける處に家臣三宅中尾乙部等三百餘騎を率して先手合せに濱田を攻めんとて兵船に取り乗り塩濱より上らんとす濱田遠江守宗武塩濱の北の方の松原に伏兵を置き工藤勢船より上る處を一度に喰と突てかゝれば工藤方案に相違して度を失ひたる所を散々にかけ立ければ工藤勢船に取り乗り引退きけり夫より彌關家威を振ひけりと

(丙)

長野勢濱田に敗る

- (一) 關安藝盛信神戸藏人太輔友盛は共に近野の日野の城主蒲生下野守定秀の女を娶りて其婿となりぬ而して定秀は六角左京太夫義賢の下に屬せるを以て二人を勸備して同しく六角家に屬せしむ此に於て峯筑前守國府佐渡守鹿伏兔宮内少輔も關氏の一にして與力たるか故同しく六角家の幕下に屬せり
- (二) 爰に長野の城主長野左衛門祐治は具藤元來北畠家の姻戚なるにより北畠家と一致し關一黨と常に相抗衡せり祐治先づ濱

田城を取らんと欲し長野雲林院草生の三家の士三宅權六三宅三右衛門中尾忠左衛門北川吉六乙部平内細野九郎右衛門分部與右衛門乙部兵庫助中尾内藏允川北匠助等五千餘人を率ひて阿濃浦より兵船に乗して白子浦を過ぎて塩濱村より上陸せんせり

- (三) 濱田の城主濱田與右衛門は赤堀の城主田原肥前守と一族たるを以て赤堀より援兵として堀木信濃守を遣はしたれば與右衛門則赤堀の援軍と共に塩濱の浦なる松林の蔭に兵を伏して相待ちたり九月十六日未明長野勢は伏兵ありとは夢にも知らず何心なく船より上陸する所を堀木濱田二百餘人を合して松林より躍り出て一手になりて時を揚げて攻め掛れば長野勢氣を吞れて戦ひ防くの心はなかりき

- (四) 堀木濱田の兩勢は此機に乗して疾く攻め四方に追散らし八方に攻め破りたれば抗するものはなかりけり然る所に三宅等は戦に慣れたる者なれば軍塵を振ふて士卒を下知し敵は小勢な

るう引き返して四面を包み一人も残らず打取れと招きければ散亂せし兵士も一所に寄り集り中に圍みて取籠めんとせり與右衛門は兵を雁行に列ね圍まれしと争ひ已に劇戰四時間に亘り互は疲れて引退きぬ

(五) 此戰に關勢の方には神戸藏人の叔父神戸某堀木信濃守等を始として強兵五十餘人を失ひ長野勢には三宅權六乙部平内等百餘人討たれけり己に互に疲れて重ねて戰ふへき勢も盡きければ長野勢は夜に乗して船に乗り長野に歸陣す濱田與右衛門は終夜松林の中に篝火を燒きて守備し翌朝首を收めて飯陣し使を以て勝利の由を神戸へ報しければ藏人太夫大に感悅せらる是より關氏の勢威愈振へり

(丁) 長野神戸に敗る

長野城主工藤家は何如にもして神戸城を乗り取らんと北島の援軍を併せ神戸へ進發す神戸の城中にては敵を險阻に引き入れんと欲し態と終日弓矢を以て應戰して敢て出て戰はず長野

勢此に於て敵を侮り龍光寺の門前を経て西城を攻む城中にては思ふ存分に城中に引き入れ暗夜に乗して千餘人一齊に突賊して之を攻めければ長野勢地理は知らず大半撃たれ逃延ひたる者も殆んど傷を負はざるはなかりけり

(戊) 波瀬勢赤堀に敗る

永祿年中北島の同族なる波瀬勢神戸の同族なる赤堀の城を取らんと欲し矢河下野守阿曾彈正忠をして赤堀の城を圍ましむ城兵力拒して多く敵を殲す矢河阿曾其抜くへからざるを知り師を率ひて波瀬に還る城兵之を見て狂歌を作りて之を笑ふ曰く

赤堀のほりの深さを知らずして

浅瀬をせゝる波瀬の御所かな

又

赤堀の庵の内の三文字に

長野の首を割菱にする

蓋し長野の紋は割菱にして赤堀の紋は庵に三なればなり
伊勢軍記に曰く

永祿二年三月長野大和守藤定三千餘騎の軍兵を率し神戸表の神戸藏人友盛の居城へ發向し在々所々に放火し鬼神岡に出張しける兩陣旗を進め相近よりければ互に鐵砲を打ちかけ足輕を出し軍を始めける友盛士卒に下知し給ひけるに此の軍敵は大勢なり味方は少勢なり尋常にては勝利を得かたし日の中は野伏軍して會尺し夜に入りて暫く此の陣を退き龍光寺邊に陣を取らは然る所に敵勝に乗て追ひ來るは必定なり此の時敵を思ふ儘に難所にたひきよせ一同に喧と取り籠め手痛く攻め戦は、何の勝利を得ること掌の内にありと諸人に下知し態と日を暮しける夜に入れば神戸勢相圖の如く諸勢一同に龍光寺をさして引きけり按の如く工藤是を見てるは神戸勢逃るゝ我討ち取りて高名せんと云ふ儘に行先難所も知らず龍光寺の門前まで追ひ來る神戸勢は敵を思ひの儘に引よせ時分はよしと龍光寺の後より數千

の松明を出し間を喧と揚げ左右よりかけ出て無二無三に討てかゝる工藤勢案内は知らず闇さは闇し前後を辨せず兩方は深田なり敵と打合するまでもなく深田へ馳けこみ或は溝畔などに轉ひ落つる所を神戸勢は元來按内は能く知りたりければ爰の田の畔彼の山蔭よりかけ出て塗を失ひたる工藤勢を豎横無盡にかけ立る長野大和守後陣にありけるか此方にては叶わすと思ひ討ち残りたる諸卒を引具し夜明ければ長野城へ引にけり

伊勢軍談に曰く

(二) 是に於て南方は戦止みたれとも北勢に於ては關の一黨勢盛にして工藤家と抗を争ひ互に相併呑せんとせり或は關勢雲林院に侵入せるあり或は工藤勢神戸に逼るあり兩雄の争戦止む時なし時に北方の諸家は多く之に服屬し千種宇野部は關家に屬し南部萱生は峯家に屬し赤堀稻生は神戸に屬す關盛信は桑名を屬せしめ豊田四郎右衛門を其の代官職となせりされとも三家又各其の勢威を争ひ動もすれば関牆の患ありたり

伊勢軍記に曰く

七二

勢北關の一黨又猛威を諸郡に逞ふす關下野寺雲林院表に打出て數度の合戦あり神戸悦岩楠濱田赤堀稻生等と一味して北方の諸士を攻む其の外一黨とも威を震ふ諸侍數多彼の幕下に屬するに由るなりと雖も關神戸峯三家統一せずして相互に其威を争ひ合戦に及ふこと數度なり故に出世の持なし

伊勢軍記に曰く

關一黨猛威を北方龜山に震ひ千種宇野部以下と一味し峯は南部加用以下と一味し神戸は赤堀楠以下と一味す六郡の内に威を振ひ吞勢下に屬す就中關盛信威を逞ふし桑名に到り之を執り豊田四郎兵衛尉を以て代官と爲す然りと雖も龜山神戸峯の三大將威を争ひ動もすれば内輪合戦あり故に一統せざる者なり夫一家利を争へば則大功立たず一人主と爲れば則國を治めて權あり共に榮耀を保つべきものなり

伊勢國司傳記に曰く

(七)

國司北畠權中納言源具教永祿年初に秋山家謀叛によりて和州神樂岡へ出陣あり事なく歸陣せらる長野家に子なき故具教卿の二男長野の養子となり長野次郎と號す此故に工藤の一家悉く國司の幕下となれり

(八)

關一黨の大將關安藝守盛信神戸藏人太夫友盛二人共に近江國蒲生下野守定秀の甥なり其頃蒲生家は六角家の一味なり之に依りて二人の甥を諫めて永祿年中に六角家の一味となせり龜山神戸の兩關一味の上は峰筑前守國府佐渡守鹿伏兔左京亮を始め六角家の一味となれり

(九)

此時始て工藤は北畠につき關は六角家につき工藤北畠家の諸侍と示し合せて船にて迫り三重郡鹽濱へよせたりし所に關衆兼てや知りつらん陸に人數を隠し待ちかけ船よりあかる所へ打寄り戦ひ大勢切り取る是大合戦也夫より關勢威を振ひ北方諸侍大形關五人の手に付屬す

伊勢軍記に曰く

七三

國司多藝の御所北畠宰相入道天祐の子息具教朝臣武威を隣國に震ふ故に近邊の諸郡其幕下に屬す東方鳥羽城を攻む鳥羽方遂に之に従ふ浦大學助忠節あり故に晴具の聲と爲す其外志摩一國二郡の諸侍小濱安樂島浦的屋相差國府甲賀波切濱島和具越賀以下之に屬す南方は大和國吉野郡の諸侍之に従ふ故に筒井(順長)越智十市久世滿田西伊藤小出等之は爲に防戦す再紀伊國熊野山尾鷲新宮十津川等の侍共之に屬す西方伊賀國は仁木家の領地なり然りと雖名張郡阿賀郡の諸侍之に従ふ北方は工藤氏を討つか爲に木造藤方兩御所並に榊原田上與山等を以て之を押ゆ或時は乙部の陣あり或時は田上の陣あり或時は細野城を攻め或時は長野城を攻め數年挑戦すること斯の如し

伊勢軍談に曰く

- (一) 北島の與力たる澤秋山の兩家は、大和の宇陀郡を領したるか、二家の間に隙を生し北畠氏の命に従はず秋山藤次郎は入道して遠州

と號し三好家の婿として威を張り且剛勇を以て隣境に聞ゆ永祿の初年具教兵を發して大和に入り神樂岡の城を攻む秋山遂に降を乞ひ父宗丹を納れて質とす此役や安保大藏少輔磯田彦右衛門先登して名譽の功を遂けたり

- (二) 右の二人は約して共に死を決すへきを契る兵を引き退くに及びて敵兵追ひ來りて磯田を搏す磯田馬より落ち乍ら刀を以て敵を刺して之を斃し將に首を搔かんとしたるに敵下より刀を以て磯田の首を斬る安保之を見て直ちに敵を斬り磯田を介抱して馬上に抱きて歸る磯田幸にして癒へたるか首少しく右に曲れり宗丹は大内山に預けられて其處に死し遠州も程なく死し弟次郎家督を襲ふて右近將監と稱し瀧川一益の婿となれり

伊勢軍談に曰く

- (一) 志摩國諸侍は年來北畠家の幕下に屬す今度九鬼右馬允嘉隆織田家船手の大將として海上より志州に亂入し英虞郡七人衆を打ち

從へ逐に答志郡に押渡りて浦大學助を攻め滅し小濱武部少輔を降し其餘悉く打從へて國中一圓平均せり元來九鬼氏は熊野侍なり先祖九鬼嘉隆初めて波切の城を守る嘉隆まで凡て六代なり志摩七人衆とは相差方國府三浦方甲賀武田方波切九鬼方和具青山方越賀佐治方濱島方なり嘉隆七家の掟を破り威を擅にして私を働きければ六家一味して之を伐つ遂に波切城は落され船に乗て勢州に遁來り暫く安濃津に居住せり夫より尾州に立越ねて瀧川一益を頼み織田家に事ね今度の一亂によりて志摩一國を攻め取り遂に鳥羽城を守て大に威を南海に震へり

伊亂記に曰く

當國武門の輩は伊陽所務の大守なきか故に已か意に任せて亂暴の所作己む事なく非道の振舞増長して田夫野人に至るまで皆出入の門戸を固め萬民は農耕の所作を失なひ蕪蕪の道を忘れ已か營む業なければ上下共に飢渴に責められ困窮するに隨ひて老を助け幼を負ひて他州に走るもの多し之に依て所々に關を居へて

國中の人民か猥りに往來する事を禁すといへとも猶忍ひくくに離散するもの多かりき郷士の輩も會合の便りなければたとひ内心に思慮ありといへとも和睦も成し難しさりなからかくては國の衰微たる事を知りて神職院主等二十四人を語らひ仲人として之を暖ひ漸く神戸の郷天童山に集まり各々評定して和談を調へ三管領の分れ仁木右京太夫義親法名友梅を江州より迎へて國守と崇む友梅入國して暫く三田の郷に居住の地を占め其の後上野村平樂寺の西側に一段高く地形を構へ殿館を造立して御屋形と稱し諸人之を敬ひて國法の裁斷をなさしむ之より諸事有体に決し下民稍々安堵の地に住むを得たりといへとも本來主君といふにもあらず馴れ來りし癖なれば自然と之を輕視し國民之を直下に見て動もすれば無法の郷士等仁木を侮りて其の下知に隨はず友梅も彼等か不義の作法を惡み郷士にして押領無道の事とも論し下す詞もありしかと元來當國の勇士は古今短慮の沙汰遠國までも隠れなきもの故に友梅も反側の間たりとも心をゆるす事なし

或は勇武を示して其の道を立てしめんとすれども却りて郷士等の勇に怖ち恐るゝ事も多かりき諸士等も仁木に向ひて媚の跡を装ひ手を束ねて頭を下くるといへども底意には常に仁木をひやかす事のみを力む斯の如く上下互に隔心ありて其の心中打ち解けされは遠からして君臣愁難の野心を含まん事をかねて諸人評しあへりこゝろ

伊亂記に曰く

されは此の國時節到來の風俗として諸人の有様正慶の頃より天正の中頃までは唯血氣の勇を専らとし軍議をなしては裏廻して脊戸に向きて戦ふ事を好まず又詞をかけすして不意に敵を討つ事は本意に脊くとして深く嫌忌す不斷未明より午の刻までは士農工商等各家業の所作を勵まし午の刻より暮まではひたすら武法弓馬の道を磨き別て惻隠術を鍛練す上代より伊賀の遺風として其の古への御色多由也より謀術を傳へて楯岡の道順甲賀太郎兵衛高山次郎太郎小串大串城戸なんと云へる名器の者國中に充滿

して其の流今に至るまで間諜の通力を傳へ如何なる堅固の要害にも忍ひ入らすといふ事なし他國にても伊賀忍とて之を重寶せり此の如く郷士の面々兵術のみを磨くか故に下部の輩も又此の風儀を倣ひける元服烏帽子着は侍百姓に限らす宴會相應に營む國風なり人を撰んで烏帽子親に頼み假名の一字を請けて雅名を改む又姓人として當國一宮敢國の社へ參詣し氏の二字を改め更へ三家通義をとなへ之を祭とす百姓は十一才にて住所の氏神に參詣す此の時御屋形とて其の主人より短刀を給はるされども敢國への參詣は郷士より許されたる者に限る又武門の輩異なる風俗あり一家の惣領に親跡を譲り二男は必出家して寺庵にあり大概剃髮しなから妻帯をなし耕作して渡世せず是れ底意に武勇を挾むか故なり且又伊賀の國は小國にて大國の陰に隠れ代々の勇士を討ち取りて領知するの暇なく闕所其の間數百年に及ぶか故に諸民已有る事を知りて他の恐れなく國の法式をも忘却して我意を働らき貴賤上下の別を辨へす古法を教ゆるの人もなければ聖賢

の道暗くなりて諸民王澤に潤はさる事久し既に文道に疎ければ人倫五常の道廢れて人外の作法多きは理なり
伊勢軍談に曰く

天文年中田丸の臣山岡の一黨池山伊賀守反を企て田丸城を襲ふ守將田丸彈正少弼顯晴防戦したれとも事不意に起り如何ともすると能はず遂に亂軍の中に戦死す是に於て北島晴具兵を率ひて田丸城に趣く山岡の一黨山上城に籠拒す晴具軍を勵まして之を破り山岡の一黨悉く平く是に於て顯晴子具直を立て、田丸中務少輔と號す

伊勢軍記に曰く

天文年中南方田丸家の侍山岡一黨池山伊賀守等逆心を企て田丸御所を攻む田丸彈正少弼挑戦すと雖も難義に及ぶ遂に少弼自害し畢る之に依りて北島宰相中將晴具卿諸勢を率して出馬す山岡の一黨等山上城に楯籠り合戦に及び遂に山岡の一黨攻め亡し畢りぬ不義を企て、主君を怨むる者は易く亡る事なり國司又少

弼の子息を立て、田丸御所と爲す後稻葉兵庫頭に田丸を給はるの時彼少弼殿荒人神に爲りて祟を爲す故に稻葉家神に祝ひ之を尊む

關岡家始末に曰く

天文十一年五月上使として右近將監清祐雲州に趣く大内介義隆出陣の見舞亦内談の爲に被遣ると云へり
天文十八年三好か亂に清祐軍功あり同十九年清祐如意嶽新城を奉行す然るに五月四日前將軍義晴公逝去に依て勢陽に趣き出家して國司の許にあり亦大和國坪坂に趣き居住すとなん息三人あり兄を義實と云ひ次男義重三男實氏と云へり
義實は天文廿三年十五歳にして將軍義輝公へ被召出近習に爲り義重實氏は南都真乘の許にあり後は大乘の坊官となりしとなん清祐は伊賀國に趣き暫く在住せしか又大和國土佐に歸り永祿六年六月七日病死行年五十九歳

伊勢軍記に曰く

(一) 弘治元年十二月十二日飯高郡鎌田の住人豊田五郎右衛門尉多氣那齋宮住人野呂三郎借債を催促せられ依て徳政の亂を發し南勢所在の無頼浮浪の徒を集めて數百人を催ふし螺を鳴らし鬨を作り諸所を放火し亂暴狼籍至らざるはなく齋宮城を根據として日夜四方を劫掠す南勢の諸士齋宮を攻めて之を奪ひ野呂の一族皆滅せらる

(二) 豊田五郎右衛門は鰭尾智積寺に籠城す智積寺は大河内家の與力にして豊田の同類にはあらず偶不在に乗して五郎右衛門侵入し其妻子を捕へて之を質とし以て敵の來るを待つ攻撃軍頻りに進んで短兵を以て急に之を攻む豊田卒先して自ら戦ふ船江の本田美作守の臣西清左衛門豊田と戦ふ高島次郎左衛門又來りて之を助く豊田遂に殺され一族悉く滅亡す豊田は先に鷲山の戦に七度の鎧の功を願はしたる人なりしか貧の爲め遂に斯る境遇に至れり

三重縣史料 卷六

仁木友梅の退居

伊亂記に曰く

爰に當國長田の庄平野山常住寺の本尊焰魔の像は御長一寸八分の尊容にてて攝津國清澄寺の住僧慈心坊尊惠上人か人王八十代高倉院の御宇嘉應年中に御經十萬部保養の節道師を勤めたるにより其の後に至りて御布施血盆經と自ら刻みたる琰王とを尊惠に與へ給ふ尊惠之を攝津國清澄寺に奉る其の後兵亂によりて清澄寺は燒失せしかは夫より琰王を播摩の書寫寺に移し幾年月を経て後の住侶伊勢參宮下の節に長田の郷百田か家に宿り急病にて果てたりき其の臨終に伴の琰王を取り出し右の縁起を述へて主人に與ふ主人は則百田七郎左衛門といへる郷士なり是より右の琰王は百田家の秘佛となり尊敬斜ならず仁木友梅其の世に稀なる尊容を聞き百田藤兵衛に對顔して之を拜見せん事を望みければ百田も國司の嚴命を否み難く立ち歸りて自ら其の本尊を守り奉りて仁木の館に遷す

友梅瑛王の躰相を見眞實執心深く數日の間其の館に留め置き返す事を違變せり百田の一族度々之を乞ふといへとも敢て返戻する氣色なし然れとも往古傳來の靈佛を他門の重寶となさん事口惜鬱憤胸中に徹し堪忍なりかたく此の上は仁木の館に押し寄せ攻め亡さんと支度し同類を語らひける先づ長田一族には朝屋大の木法華の勇士長田の者は記するに及はず大邊一黨には木興久米淺宇田三郷の侍ども此の外上野村小田南五ヶ郷の兵士古山七郷大内上下猶又他領他村の勇士共親族縁者の好みを以て馳せ來り其勢雲霞の如し仁木之を見て大に仰天し早々本尊を百田か方へ返しける然りといへとも彼か我儘なる國司の權につのり奢を極むるの奸曲を惡み此の時を幸ひとして名にあふ勇士共談し合せ仁木を討ち亡さんご手合せし百田藤兵衛福多將監町井左馬加藤將監森田淨雲觀興寺勘八等の輩七段に備へ塵を揮ふて下知をなし家々の旗幟を捧けて炎天に輝かし木興長田郷の邊に支へたり仁木友梅も是非なく家外に軍旗を靡かし諸勢を諸所に控へさせて敵對するか如くに見せかけ

天正五年五月十日の夜半に猛勢の亂逆に打ち紛れ江州信樂の卿に落ち行きて蟄居しけるとり聞へし

德政の亂

伊勢軍談に曰く

(一) 弘治元年乙卯冬十二月飯高郡鎌田の住人豊田五郎右衛門尉多藝郡齋宮の住人野呂三郎以下南伊勢在々所々の溢れ者とも數百人一味同心して借物を破る爲め德政の亂を發す一味の者とも馳せ集まり螺を吹き鬨を作り諸所を焼き立て齋宮城に取り籠る南方の諸侍馳せ向ひて之を討伐す此時宇治山田の住人等亦同心の者多し其中山田の住人益元家の狂歌に曰く

德政の鎧提て久欠と思へは物を假の世の中

(二) 又豊田の一族等平生の智積寺の城に取り籠る此智積等は大河内家の與力たり其同類にあらず折節留守なり豊田智積寺の女房を以て人質に捕へ防戦す南方衆馳せ向ひて之を討伐す彼豊田なる者先年小森上野に於す七度の鎧を突きたる大剛の者なり然りと

雖も逃るゝなし斬て出て手柄を振ひ防ぎ戦ふ終に船江本田美作守の侍中西清左衛門尉と渡り合ひて之を打つ同高島次郎左衛門政光助太刀を打つ斯の如き亂世には心強威にして借物を破る爲めに亂逆を發し遂に其身を失ひ畢りぬ小利を貪りす大失を知らす凡て惡逆を企て非法の謀を廻さは則易なく滅亡するものなり

三好義繼伊勢を侵さんとする

伊勢軍記に曰く

(一) 將軍足利宰相中將源義輝卿は尊氏八世の孫足利大納言義晴卿の御子なり然れども萬松院義晴卿去る天文十九年夏五月四日逝去の御時阿波國三好修理大夫源長慶に頼り京師の執權と爲る彼三好は元細川家の侍なり其頃武威を以て四國を管領す其後長慶逝去して子息三好左京大夫義次執權と爲る是將軍の御姉輩なり義次無道にして三好の一黨左京大夫に背き五畿内を治め其功に誇り三好日向守同下野守冬康以下の一族並に松永彈正久秀岡成主税助等一味同心して謀叛を企て將軍を討たんと欲す

(二) 彼義次は將軍の御姉婿一味たるの故に永祿八年乙丑夏五月俄に二條城を攻め破り遂に義輝卿を討ち奉る御年三十歳なり惡逆無

道之を述べ難し其後三好山城入道笑岩威を逞ふし五畿内を執る同九年丙寅春正月三好の一黨大和國筒井越智吉野十津川宇陀郡より伊勢國に攻め入らんと欲す國司宇陀に於て澤秋山芳野等を以て之を押し又要害を拵へ堅く用心し合戦の企あり故に攻め來ることを得ず此時伊勢の衆少々逆心を企つ者あり船江の本田の一族本田平八郎又三好と一味す之によりて其弟平九郎生年十五歳なるを人質となし多藝に在り御麻生園に於て之を誅せらる

伊勢軍記に曰く

光源院義輝卿の御弟奈良の一乘院家永祿八年秋八月密かに江州に下向し還俗を爲し足利左馬頭義昭と號し六角家に頼りて亡君の讐を報せんと欲す是によりて六角家父子諸勢を引率して同九年春京都に攻め上り三好家と合戦に及ぶ三好暫らく都を開き攝州に在り同族七人山田に落ち來る國司諸司に命して中島に於て

之を討つ故に三好一族留まることを得ず(虫喰の爲不明)
勢陽軍談に曰く

(一) 三好修理大夫長慶は阿波の人にして細川家の執權たり四國を管領しつゝ、京都に於て細川氏を亡ぼして天下管領の職を行ふ長慶死して三好の一黨勢威の餘り松永久秀と共に永祿八年五月二條城を攻めて將軍義輝を弑し五畿内を併呑し遂に伊勢を取らんとを圖る

(二) 北島家は是を開きて戒嚴し諸道の要道を堅め防備を嚴にす時に船江の本田の一族平八郎潜に三好の一黨と共謀の由聞けければ其弟の平九郎北島の城に來りあるを誅せり時に南部の一乘院の住職某兄義輝の仇を復せんと欲し密かに近江に逃れ足利義昭と稱し永祿九年春六角入道義賢父子の救を得て軍を率ひて攻め上りければ三好の一黨戰敗れて京都を去れり

(三) 此に於て伊勢侵入の企圖は茲に中絶せり六角入道義賢は一旦義昭

に供奉して忠勤を盡したるか幾程もなく隙を生し永祿十年秋却て三好の黨と和睦して義昭を圖る是に於て義昭若狹に逃れ武田義統か許に寓し夫より越前に趣き朝倉左衛門義景に義兵を起さんとを依頼す義景顯みす義昭頗る窮す

伊亂記に曰く

伊賀神戸の庄館明神事に就て上林村の矢具島氏天五年九月十七日一門并に他客を集めて酒宴に及ひける其の坐に於て今度友梅との合戦の噂をとりくりに噂しけり列坐の輩兩方に分ちて争ふ中に加藤將監中清六双方頭たち先つ清六進み出て、いふ様は寄手の仕形をろしり友梅か圍をぬけて落ち行きし事を譽めける加藤は其の時の寄手の内なれば清六か言分僣事なりと争ひ遂に双方の喧嘩となり清六刀を抜て加藤を討ちたれば夫より坐中最負くゝに別れて搔動に及ふ然れども觀緣寺の社僧神官其の外折合ひて其の坐を鎮めけり翌日加藤か息男熊之助勢を卒ひて清六

を討たんと比自岐に向ひ猪田村を過ぐる時森田淨雲先年の意趣を以て猪田を過こさず觀興寺勘八は加藤が味方となりて小泉を語らひ依那具の地を押し通す清六か一族沖才良川邊に出て、戦ふ事度々なり森田は清六に與力し觀興寺は加藤に與力して戦ひしか互に勝負決せず暮に及び相引き退く事數月を経るに至る是に依て平樂寺天童山に及びて大岡寺の住職天正六年九月十二日評定衆に相談して暇ひけり戦之に因て鎮まりたり其の後熊之助身をやつし時節を窺ひて親の敵を討たんと思ふ處に同七年織田信雄當國征伐の沙汰漏れ聞わけるにより其の防戦の覺悟を專用として清六を討つ事を延引す其の中に清六も病て死けり加藤は此の二年を経て比自山の合戦に討死を遂げたりける

伊勢軍記に曰く

(一) 國司の侍宇陀の兩家澤秋山不快にして動もすれほ私に干戈を發して國司の政道を用ゐず就中秋山入道宗丹の息子秋山次郎は大和の守護三好家の守護となり威を逞ふし内意を以て謀叛の志あり

殊に大剛の兵なり故に威勢を國中に震ひ國司の命に背く之に依りて永祿の始め比國司伊勢の勢を率して宇陀郡に出張し和州神樂岡の城を攻めらる

(二) 秋山人數を出して合戦を始め安保大藏少輔磯田彦右衛門尉先を懸けて攻め戦ひ高名を致す兼て此兩人は一所に死すへきの約諾あり然るに味方我陣に引返しの時敵幕ひ來り馬上に於て磯田と組み未だ地に落ちざるの以前磯田早く刀を抜きて之を突き敵を押し之を討たんと欲する處に敵下より刀を以て磯田の首に掛け過半引き落す磯田已に危き處に安保遙に願み約諾を思ひ出して返り合せて敵を討ち手巾を以て磯田の首に巻き付け抱き上げ馬に乗りて引き還す誠に仁義の勇者なり人舉て之を譽む

(三) 磯田存命し疵愈へて後少しく曲る其後秋山手痛く攻められ降參を乞ひ藤次郎剃髮して圓秀と號し逆意なきか旨父宗丹を以て人質に出す國司此を預かられ大内山に引き還す後宗丹大内山に死す其後秋山圓秀亦死去す其弟秋山次郎其跡の職を給はり後右近

衛將監に任す瀧川一益の諱と爲る者はなり

蒲生家と關家との關係

伊勢軍記に曰く

- (一) 爰に近江國蒲生下野守藤原定秀は武藏守秀郷の後胤薄生刑部大輔入道智閑の孫同左衛門高江の子殊に祖父智閑法師は武略ありて歌人なり其家を分ち嫡子刑部大夫秀行は將軍家に奉公なり次男高江は六角家に屬し三男左馬允秀順は細川家に仕へ然して秀行子藤兵衛尉秀紀と與に不快にして定秀六角氏に頼りて遂に亡ふ惣領秀紀故に其比専ら六角家の幕下に屬し文武の達人なり數度の忠功に六角家に執權し兼て伊勢國を謀らんと欲す故に小倉三河守勢發行の時其功を惡み小倉分領の民屋に推し寄せ悉く放火す此時日野衆等今様の小歌を作りて之を諷ひて曰く
- 日野の蒲生殿は百廿八郷小倉與力は伊勢はかり
- (三) 小倉滅亡の後彌定秀勢州を謀らんと欲す故に一黨の大將關安藝守盛信を以て諱とす是關下野入道我持齊の子息なり又同神戸藏

人具盛を以て諱と爲す是神戸樂三の孫同悅岩の次男なり末子たるによりて元土師福善の住僧たり舍兄神戸太郎四郎神戸を嗣く後下總守に任す然れども永祿の始めに早世す法名涼岩と號す子息なきによりて舍弟藏人神戸の家督を嗣く是によりて關神戸を以て六角家の一味と爲さんと欲す

(三) 然れども永祿六年癸亥春三月三日義賢の子息右衛門督義彌卿無道にして執權後藤但馬守同對馬守父子を誅戮す之に因りて後藤の一族並に國中の諸士悉く六角家に背き觀音寺の城を攻む爾時義賢父子蒲生家により日野城に楯籠る國中の諸家一味同心し江北淺井家に語らひ日野城を攻む殊に江北上坂兵庫助は後藤但馬守の舍弟なり上坂治部少輔の養子と爲る

(四) 蒲生定秀の子息左兵衛大夫賢秀も亦後藤但馬守の姉諱なり然りと雖も主君を敬ひ親族を離れ獨り忠節を致し遂に君臣の和睦を關へ但州の次男後藤喜三郎を立て、國中の無爲を致す是拔群の忠功なり故に蒲生父子其頃六角氏に權柄を司とる

(五) 定秀の子孫繁昌し嫡子賢秀を以て家督と爲し次男茂綱を以て青地家の養子と爲し青地駿河守と號す三男實隆を以て小倉家の養子と爲し小倉豊前守と號す其外の女子は勢州に於て關家神戸家は聲なり江州に於ては池田次郎左衛門尉忠知美濃部上總介聲なり斯の如く其家繁昌し餘威を以て勢州を謀らんと欲す

(六) 蒲生下野守定秀連々關家神戸家を諫め永祿の中比始めて和睦せしめ六角家の一味と爲す神戸龜山同心によりて一黨峰筑前守國府佐渡守鹿伏兎宮内少輔以下自然に六角家の一味たり但し被官にあらず彼神戸は國司の一族にして近代北畠家の一味なり然れども今關家に同心して六角家に屈す是不義の甚しきものなり
勢陽軍談に曰く

(一) 近江の日野城主蒲生下野守定秀は藤原秀郷の後胤と稱す元足利氏の臣下にして一千人の大將なり當時六角家に屬し功を以て其執權たり其頃傳唱せられし今様の歌に曰く日野の蒲生殿は百廿

八郷小倉與力は伊勢はかりと以て其勢を知るへし小倉三河守横死の後は定秀相續て伊勢を圖り之か爲に關安藝守盛信其二女を嫁し又縁により神人藏人友盛に其三女を嫁せり蓋し其關係を利して六角の下に屬せんとするなり

(二) 永祿六年三月六角義質子右衛門督義弼の執權後藤但馬守を事に因りて誅戮せるにより後藤の一族並に國中の諸士悉く六角家に背きて觀音寺の城を攻む義質父子力盡きて定秀を頼みて日野城に籠る諸勢遂に江北の淺井家を頼みて大野を以て日野城を攻む定秀の子賢秀は後藤但馬守の姉聲なれども親戚に離れて主君を守り遂に中裁して和睦を結はしめ但馬守の次男喜三郎を立て、後藤の家督を相續せしめ國內漸く靜謐に歸せり

(三) 此功により蒲生家は益重せられ六角家中に大に其權威を張れり定秀の次男茂綱は青地家の養子となり青地駿河守と稱し三男實隆は小倉家を相續して小倉豊前守と稱す女子四人池田治郎左衛門尉美濃部上總介關安藝守神戸藏人太夫に嫁す關安藝守に嫁す

此の如く其家繁昌して餘威遂に伊勢に及へり此に於て關神戸峯國府加伏兎皆六角氏に屬せり

關岡家始末に曰く

關岡義實は十五歳より義輝公へ仕へて功あり永祿八年五月十九日三好左京大夫義繼松永右衛門佐久通三好日向守同下野守同與助同帶刀左衛門安宅木冬康十河一存野口長等相議して俄に謀反を企て御所に押寄せ猛勢にて攻ければ御所に合輩も是を拒と雖も敵多勢なればたまらず義輝公自ら自刃を取り數度出て戦ひ遂に薨したまふ其時義實は強敵三人討捕それより大館晴光と相議して晴光は固詰に告たてまらんとて北山に赴く義實は南都に赴き覺慶を密に春日山に忍はせられより江州甲賀の郡に保奉して近習にあり義昭公若州北越尾州旁に御流浪の時も義實は其膝本を離れず二度の天下となりたまひて後義實數度の軍功あり永祿十一年八月義昭公の命を受けて織田信長に屬し觀音寺城築作城和田山城を攻て軍功有り信長是を賞して數通の証文を賜ふ

同年九月廿九日義實義昭公に供奉し勝龍寺の城を攻む岩成主税降參により芥川の城を攻め同十月朔日細川六郎と相戦ふ事數回遂に六郎に打負て退散す
同日義實上使として信長の陣に赴き信長の勢に加はり池田の城を攻め落す池田筑後守降參す義實則行向て人質をとる

勢州四雄

勢州四家記に曰く

一當昔伊勢國は四家に分て守護せり南五郡は國司領なり北八郡は工藤の一家關の一黨其外北方の諸侍守護する故に國司家と工藤家と戦ひ工藤家と關家と戦ひ關家と北方諸侍と戦ひ朝暮兵亂止むとなし

(一) 伊勢の國司は村上源氏北畠家なり元來は一家なれども武の家なり先祖北畠權大納言源親房卿後醍醐天皇に味方せられしより勢洲南方並に和洲宇陀郡を守護し一志郡多藝に屋形あり代々多藝の御所と云へり人數侍地下人共に軍兵一萬の大將たり南伊勢に

於て北島の一族三大將と云ふは多氣郡田丸の御所飯高郡大河内御所同郡坂内御所なり各侍地下人共軍兵千之大將也其外一族には一志郡波瀬御所同郡岩内御所同郡藤方御所此等は各五百の大將なり一族勢與力合五千人此人々は皆國司の被官なり北島家の幕の紋は割菱也又和洲宇陀三人衆と云ふは澤秋山芳野也昔は國司の與力後には被官となれり彼等何も大名也並一志郡木造の御所は國司の與力にて是も千の大將なり油小路殿と云へり

- (二) 工藤の一家とは工藤左衛門尉藤原祐經の後胤なり先祖工藤治郎左衛門尉親光足利尊氏卿に事へ子孫繁昌して勢洲安濃郡長野に居住し名字を長野と號せり工藤の兩家督といふは右長野工藤の大將なり菴藝郡雲林院と一味す各侍地下人共に軍兵千の大將なり此兩家は足利將軍家の侍なり其外一族は安濃郡草生工藤家同郡細野工藤家等なり何れも長野の與力として各五百の大將なり工藤與力合せて五百人なり幕の紋は三引兩也
- (三) 關の一族とは六波羅太政大臣平清盛公の後胤也先祖小松内大臣

重盛公天下を治め給ふ頃次男小松新三位中將資盛卿十三歳の時殿下と乗合ひ依て勢洲鈴鹿郡關谷久我と云所へ六年の間流さる其時一子あり源氏の世となりて北條家は是を預り命を助け盛國と號し關東にて死去せり其子關左近太夫將監實忠始めて關谷を領知し關と號す其苗裔關四郎足利尊氏卿に仕へて繁昌す關の三家督といふは鈴鹿郡龜山河曲郡神戸鈴鹿郡峯何も關家なり各侍地下人共軍兵千の大將なり同五大將と云ふは鈴鹿郡國府關家鹿伏兔關家と三家督となり何も五百の大將なり關勢與力五千人なり此五家は皆足利家の侍なり關家の幕の紋は上羽の蝶也

(四) 北方の諸家とは三重郡千種家侍地下人共に千の大將なり同郡宇野部後藤家赤堀家阿久良川家楠家濱田家敷古家菴藝郡稻生家朝明郡茂福家羽津家木俣家柿家萱生家員辨郡上木家細生家其外失念次には等百騎五十騎或は二百家の大將四十八家あり何れも一味同心して諸事軍配せり各足利家に仕へし侍なり
赤堀濱田羽津は元一家にして田原又太郎忠廣の末也羽津先祖

は赤堀衛門太夫と云へり二代目大膳介三代目上總守四代目肥前守五代目因幡守六代目右京助元龜三年壬申六月朔日に茂福城主山口四郎右衛門とは縁者なる故料理を振舞たきと謀て呼請ひ竊に空す(空すとは殺したるの意)然れども羽津に残る一族城を渡さず取合ありとる阿久良川家は平貞盛の末館太郎貞治の後胤なり天正元年癸酉四月廿八日濱田家の侍大將丹羽黒田伊達中島の四大將二百騎を卒し阿倉川の城近く攻め來る阿久良川の城主館薩摩守下知して二男兵庫三男彌三郎貞隆に百騎程相副へ城の南へ三四町程出て迎へ野間深田の細道にて取合あり阿久良川勢案内は知たりかしこの深由爰のつまりへ押懸け挑み戦ひしかは濱田勢たまらず五六町程引退く此時手負打死兩方に多くあり館彌三郎貞隆勇者なりしかは逆るを追ふ事法過ぎたり薩摩守貞清矢倉の上より之を見彌三郎危し討すな者共續けや續けと下知す案の如く菰野道の邊にて敵伏勢をもて鎖砲を打ち彌三郎打死す

(五) 右之四家合戦度々也國司家隣國にて武威を振ひ東之方にては志摩一國二郡の諸侍鳥羽家以下國司に従ふ南は大和吉野郡の諸侍並に紀伊熊野山の諸侍從ふ西は伊賀國四郡は仁木家也然れ共名張郡伊賀郡の諸侍したかふ是等皆漸々に歸服せり亦關の一黨も武威を振ひ北方の諸侍多く從ふ其外國中在々所々したかひ或は一搔を發す事多しとなり

伊勢軍談に曰く

長野家由來

(一) 安濃郡長野城主長野左衛門祐治は藤原鎌足十九世の後裔工藤左衛門尉祐經より出つ祐經より八世の孫工藤治郎左衛門高景鎌倉にありて北條氏の幕下たり元弘の軍功に依りて伊勢の長野郷を給せらる同三年北條氏滅亡の後足利氏に仕へて本領を安堵せらる曆應三年感狀は給せらる

於伊勢國遂合戦悉屬味方之旨神妙候彌可抽戦忠者也

曆應三年五月廿五日

尊氏

〇一〇

工藤庄司とのへ

(二) 延文五年八月伊勢の守護仁木右京太夫義長足利尊氏に叛し長野城に籠る仁木某石堂頼房をして伊賀伊勢の與力を率ひ近江の葛木山に進み九月廿八日佐々木判官崇求を破る此役義長の勢は伊勢の住人矢野下野守工藤判官後藤彈正忠波多野七郎左衛門尉同彈正佐脇三河守高島次郎左衛門淺香荻原河合服部等戦死す夫より義長長野の籠城數年に至れり

(三) 尊氏近江の六角家及土岐善忠等をして七千餘人を以て之を圍む伊賀伊勢の諸士多く義長に反く義長因て南朝に降る已にして又叛きて尊氏に屬す尊氏其勇武を愛し再伊賀伊勢の守護となし以て北畠氏に備へしむ長野氏時に義長の下に屬し専ら北畠氏に當る其後子孫連綿として相續き安濃菴藝を領し一族門葉益繁榮せり當時長野の一族左の如し

雲林院 士六百人 内馬上百騎 卒四百人 合せて一千人

長野家 同上

草生家 士三百人 内馬上五十騎 卒二百人 合せて五百人

家所家 同上

細野家 同上

分部家 同上

乙部家

中尾家

河北家

長野家

長野の與力なり三家併せ一千人
總勢五千人内馬上五百騎なり

伊勢軍談に曰く

關家の由來

(一) 鈴鹿郡龜山城の關氏は平重盛より出つ重盛の二男資盛嘗て關白基房に遇ひたるに資盛平氏の威に誇りて下馬せず爲に基房の從者に引き下され侮辱を受けたれば祖父入道清盛大に憤りて基房の車を摧拆せしめ從者の髪を切りて其怨を散す重盛資盛の無禮

を責めて伊勢に追ふ時に伊勢は平氏の管國なり資盛鈴鹿の久我の庄にあると六年其間一女を寵し男子を生む許されて歸京するに及んで男子は久我に残し置き終に已は平氏の滅亡と共に西海に戦死す

(二) 頼朝北條時政を京都に遣はして大に平氏の遺類を索む資盛の子盛國又囚はれて鎌倉に送られしか頼朝重盛の舊恩を思ひ死を宥して北條時政に托す盛國此に於て北條氏に事ふ盛國の子を實忠と云ふ元久元年伊賀伊賀の平氏の餘黨蜂起せるの時實忠獨り之に與せず使を遣はして之を關東に報す此に於て平賀朝雅兵を率ひ實忠を以て郷導となし兩國の平氏を平く實忠功によりて鈴鹿郡關谷を給はり關左近大夫と稱して龜山に住せり其弟左衛門尉盛綱鎌倉に在て北條氏に事へ長崎氏と稱し北條氏の權臣たり

(四) 實忠の子關左衛門尉定綱家系を嗣きて寶治元年北條若狹前司三浦泰村謀叛の時泰村に黨し關の所領を役收せられ流寓して再本

國に蟄居す六世關四郎四郎盛忠に至り足利尊氏に屬し關家を再興して龜山若山の地に城を築きて居住す或は云ふ元弘三年五月北條高時滅亡の後六世孫盛忠當國關谷に還住す平氏の餘黨多き地なれば崇敬して之に仕ふるもの益多しと盛忠男子多し
(イ) 長子關太郎盛澄は河曲郡神戸に住し神戸を氏とす
(ロ) 二男關次郎國府に居る
(ハ) 三男關三郎盛繁關家の本統を相續して龜山城主たり
(ニ) 四男關四郎盛宗鹿伏兎城に居る
(ホ) 五男關五郎政實峯城に居る
是を關の五大將と稱す其餘子孫の所々に分居せるもの多し
(五) 延文五年甲子仁木右京大夫義良謀叛の時關一黨足利氏に屬し軍功を以て鈴鹿河曲二郡を總領せり

關の三家
龜山 廿四郷を爰し侍六百人の内騎馬の士百騎小人
神戶 四百人合一千人の大將なり
峯 同上
同上

關の二分家

國府

十二郷を爰す内一郷は菴藝郡白子なり侍三百人の中騎馬の士五十小人二百人合せて五百の大將なり

鹿伏兔

十二郷を爰す内一郷は朝明郡の宮田なり餘は同上

峯城關家由來に曰く

(一) 時に鈴鹿郡龜山の地に城を築く(今の舊館の城趾是なり)則鈴鹿河曲の二郡を領し長男盛澄(後和泉守に任し實重と改む或は治部少輔とも云ふ)二男の盛門三男の盛繁四男の盛宗五男の政實合せて男子五人あり長男實重を河曲の郡神戸に置き廿四郷を領せしめ二男盛國を國府に置き十二郷を領せしめ四男盛宗を加太に置き又十二郷を領せしめ五男政實を峯に置きて廿四郡を領せしむ三男盛繁龜山に在住して關の正統たり是も城の廻り廿四郷を以て領地の分とせりと云ふ都合關家の五流是を關家の五大將と云へり

(二) 越前守政實は關左馬助實治の五男にして初め鈴鹿川崎の峯に城

を築く乃ち城廻りの地廿四郷を領知せり其城地は東西七十五間南北四十間中央に殿守を設く殿守の臺は東西八間南北六間と云ふ

(戌) 峯氏の沿革

(一) 政實の子を主水佐某と云ふ主水の子を但馬守某と云ふ但馬守の子を大和守某と云ふ此三世は詳なる書記なし又子に傳へ兄弟に譲るものも其詳なることを欠く

按するに政實長壽たりと雖應永正長永享年間の人なるへし此中間三世を傳へて百餘年の星霜を経たりと見ねたり凡て此年間の詳悉く分明を闕く

(二) 和洲某の子を越前守盛憲と云ふ(或は盛信と記したり)此四世惣領の關家に肩を比して近郷廿四邑の領首なり其部下地下人侍共に六百人此内馬上の士百騎小人四百人合せて一千人の大將なり峰の與力には田原の山尾原の堀内峰代には長臣は下井大久保(按す

るに大久保に住して大久保伊豆守と云へるなるへし(青木白木(白木左近は關の與力なり按するに是は其別家支流たる者か)伊藤の輩なり乃關の五大將の一家にして本支繁榮し兵威を勢北に振へりと云ふ盛憲(一名盛信)元龜庚午の歲十月五日に卒す盛憲の子を治部少輔久次(一名大和守盛定と云ふ)と云ふ

按するに大和守盛益と云ふは此盛定の一名か証する所詳ならずと雖も盛定盛益に改め或は久次に改むるものならんか川崎原等の書記此盛益を以て天正十二年甲申五月六日峰の城に敗死すと云ふは甚た誤るものなり天正十二年甲辰の年五月六日は久次の子與八郎清信の濃洲加々井の城にて討死の年月なり峰の落去せしは同年四月十二日にして城主は峰家に非す信雄の長臣佐久間甚五郎なり峰家退城は是より十一年前にして天正甲戌の年秋冬の間なり此時峰の城を岡本下野守宗憲に賜ふ峰家の與力臣從多くは岡本下野守の與力となりと云ふ然る時は盛益と云へるは久次の一名にして天正六戊寅年三月五日

四十八歳にして峰の城地に卒せしならんか頗る詳ならず天正十二年五月と云ふは誤なる証多しと知るへし

(三) 久次の長男を八郎四郎盛祐と云ふ二男を與八郎清信と云ふ八郎四郎盛祐は天正二甲戌の年秋織田信長卿當國長島の一向宗を征伐の時同宗加太六郎四郎盛氏と共に信長卿の二男三七郎信孝の先陣に進み九月二日を以て盛氏と一所に長島に討死す

按するに時に年廿一歳なるへし原或は川崎等の記四十八歳に作るものは誤なるへし時を按するに此時父の久次未だ存在して嫡子盛祐を長島にやりて信長の先鋒に連ねしならんか而ふして久次天正六戊寅の年三月を以て卒す年四十八次男與八郎清信年未だ幼なし去るに依て神戸信孝其領地を滅して勢洲の他地に移せしと見たり又川崎原等の記盛祐年四十八歳と云ふもの又三十一歳と云ふものも皆誤なるへし

(四) 盛祐(一名盛治)長島に討死し其弟與八郎清信年未だ幼少たるによりて其領村を沒收し小知を勢洲の内他所に賜ひて其所に移し居

らしむと云ふ(勢洲の内何れの地と云ふ事は詳ならず)峰の城邑は共に岡本下野守守憲(一名良勝)に賜ふ峰家の餘力從臣は悉く宗憲に屬せらる清信は餘所に移されて年月を送れり(時に清信六歳か八歳なるへし)斯くして川崎以東悉く神戸信孝の下に従ふ

按するに清信小知を賜ひて餘所に移されしは天正六年父久次卒せし時のか然りといへども勢陽諸記を以て考ふる時は越前守盛憲は先きに卒して其子大和守盛定元龜の初年に卒し嫡子八郎四郎盛治(一に盛祐)天正二年を以て長島に戦死の年其幼弟清信幼なるを以て小知を賜ひて他の地に移されしも知るへからす然りと雖考索する時は祖父の盛憲元龜の初年に卒し父盛定(一名久次)天正六年四十八にして卒せしなるへし盛治四十八歳にして討死すと云ふは疑はし廿一歳なるへし左なくては盛憲卒去せしよりの年曆に相應せず盛治清信共に盛憲の子とする時は年曆に疑多しと雖盛憲の子は盛定たるの其証多ければ盛治の年齢四十八とするもの誤を傳へしとするもの誤を傳

(巳) 峰家零落後の峰城

へしと見わたり勢陽の地此年間すへて織田に掠奪せられて其家々或は殺害の災又は逃亡せしによりて其家の小記も散亂し寺塔は焼亡の害に逢ひて記録も灰となりしかは世の小話俚話を以て後年に書記せる者多し故に其記と年曆と結合せざるものも又少なからす今証たるへきの記を搜索して考投すると斯くの如くならされは年曆時日共に相應せざるものと知るへし

(一)

岡本下野守宗憲川崎峰の城邑を賜はり居住すると凡九年(或は五年なるか)天正十壬午の歳六月信長公父子明智日向守源光秀の爲めに京都本能寺にて生害す羽柴筑前守平秀吉西國より攻め上り山崎の一戦に逆臣光秀を攻め亡ほし其兵威を天下に轟かせり信長次男の信雄は北畠國司の養子たり南伊勢を領す信長の三男信孝は神戸の養子として北伊勢六郡の惣鎮たり

(二)

此時に信雄信孝兄弟睦しからすして羽柴秀吉は信雄を助く柴田勝家瀧川一益(共に織田の老臣たり)は信孝を保護す斯くて京洛以

東尾濃二洲互に相侵掠するもの麻の如し龜山の關安藝守盛信入道萬鏡其子右兵衛尉一政川崎峰の岡本下野守宗憲は羽柴の應旅に屬從せり

按するに此時の前天正九年關安藝入道信長の赦免を蒙り龜山に歸住して家督を繼ぐべき約定あり家臣葉○藤左衛門か異見は二男右兵衛尉家督たるへしと論し岩間八左衛門は三男勝藏を嫡子に立てんと云ふ安藝入道若○か異見を用ゐて二男右兵衛尉一政を以て家督とせり其嫡男種盛天正二年長島に討死し家督を繼ぐべき子息を定めざるか故なり此に於て岩間の一黨の士其異見の空しくなりし事を憤りて常に不平の逆意を含めり

(三) 天正十一年春正月關安藝守盛信入道萬鏡齋其嫡子右兵衛の尉一政父子柴田秀吉へ年改を賀せんか爲に上洛せり此留守に乗して其家臣岩間か一族餘黨四十三人使を長島の瀧川の許へ走せて萬鏡父子上洛せりあわれ御馬を向けさせ候はんには龜山の城を以

て其麾下に屬せんとり申し送りける

(四) 瀧川伊豫守一益子細なく領掌し數千の兵を發し龜山をさして雷動せり先づ川崎峰の城を攻めむと兵衆を差し向はしむ城主岡本下野守宗憲其兵勢に敵し難きを恐れしにや城を明けて南伊勢に没落す瀧川やかて峰の城を取り其姪瀧川儀太夫詮益を以て峰の城を守らしむ峰に屬する與力津賀の小林筑前原の堀内帶刀或は伊藤種樂其外小岐須の常陸介山本の刑部初め悉く瀧川に降參して峯の城に馳集まれり

(五) 一益此勢に乗りて龜山の城を取り家臣佐治新助を籠め置きぬ爰に於て國府の次郎四郎加太の左京亮も一益に降參す一益則國府加太を率ひて神戸に發向す神戸與五郎(信雄)の長臣なり神戸信孝此時に濃洲岐阜に移れり則神戸の城を以て兄信雄に屬す乃信雄其長臣神戸與五郎を差し置きたりと云ふ防戦すと雖敵する事能はずして降參せり

(六) 一益は神戸の城を取りて之に住し鈴鹿河曲の二郡に政令を施し

行ふ關の入道父子は龜山に歸る事能はずして江州日野の蒲生賢秀父子に便りて日野にあり(萬鍊は賢秀の妹に嫁して姻家と云へり)此事を京都に告ぐ羽柴家此事を聞て安からず思ひ(時に京洲にありて七道の政令を司る乃此時江洲長濱の城主なり)同年正月廿三日羽柴秀吉七萬五千の大兵を率ひ先勢洲に發向して瀧川伊豫守一益か横行を止めんと其兵を三つに分ちに一軍は員辨郡へ進む(土岐多羅の口より發向せしむ)一軍は三重の郡へ進む(君か畑より發向せしむ)一軍は鈴鹿の郡へ進む(安樂越より發向せしむ)

(七) 此街道は秀吉自ら三萬の軍を率ひ先陣は蒲生飛彈守氏郷關安藝入道萬鍊其子右兵衛尉一政なり峰の城の攻手は羽柴小一郎秀長三好孫七郎秀次長谷川藤五郎秀一織田上野介信包堀久太郎秀政筒井伊賀入道順慶池田勝三郎信輝稻葉伊豫守良通氏家左京亮伊藤掃除介等其勢二萬五千(は云ふ三好秀次は向はず)信雄の家臣津川玄蕃允も馳せ加わり峰の城を取圍みて責め戦ふ城中強兵三千計り心を一に極めて防きけりと云ふ(織田上野介か落首此時にむ

り)

(八) 然るに柴田勝家北國より兵を出すの告あるにより關安藝入道初め森隼人前野勝右衛門一柳市助山岡美作守青地四郎右衛門等を峯の城の押となし秀吉は江洲に趣き給ふ城中には瀧川詮益與力の士小林堀内伊藤か輩力を盡して城を守ると雖も糧盡きぬれば詮方なく百日の程は堪ゆといへとも孤城籠守の形勢なれば寄子の扱に事寄せて瀧川詮益城を抜き桑名へ逃亡し一益と一つになりしとる

按する此時龜山にては佐治新助も已に蒲生氏郷及關安藝安藝入道父子に追落され國府加太神戸も秀吉信雄に降り峯一城のみ孤獨の籠城と成りし故なり

(九) 斯くて峯の城は信雄より其臣佐久間甚五郎に給ひしなり此時より先に信孝及勝家も亡ひて天下は秀告卿に隨從せり

(庚) 峯の系統斷絶

(一) 天正十二甲申の歲秀吉公信雄と矛盾に及び給ふ伊勢の北方信雄

に屬する城は神戸國府峯千種楠持福濱田上木菰野長島等なり(峯の清信も同じく信雄に屬せしなり)同年三月廿一日羽柴宰相秀吉卿十二萬の大兵を率ひ織田中將信雄追討の爲め勢尾の二洲を指して發向し給ふ四月中旬蒲生飛彈守氏郷關安藝守萬鏡同右兵衛尉一政進藤山城守に令して峰の城を攻めしむ

(二) 城主佐久間甚五郎防き戦ふと雖其勢日々に衰ふ同十二日蒲生の士將坂源左衛門か下知として七か尾の蹊道を取りて城中に亂入す甚五郎(一)に甚九郎に作る(防くと云へとも蒲生の強兵かきにかゝりて乗入りし程に力戰敵し難く終に城中を逃れ出て、尾洲の方へ落ち行けり其餘の殘黨或は討たれ或は逃亡す時に小岐須山本の輩も悉く討死す國府神戸楠赤堀上木濱田も各城を拔きて尾洲を指して落ち去ると云ふ

(三) 同月廿九日秀吉卿大兵を發して濃洲に發動し給ふ同月二日加賀井の城を攻め圍ましむ(城主加賀井騎河守の子息與八郎之に籠る)信雄林與五郎其子十藏並に勢洲逃亡の將千種三郎左衛門忠基濱

田與右衛門宗治峯孫三郎清信(與八郎時に名を孫三郎と改むと云ふ)楠十郎片山主計小泉甚六小坂孫九郎等其勢二千を以て加賀井を援く時に加賀井降を乞ふと雖も救命なし同六日城中謀て寄手へ夜討をかけ其勢にのりて城中を逃れ去らんとす

(四) 夜半勢洲の兵千種峯濱田の輩秀吉公の先將の陣へ突き出す寄手の兵押包んで責め戦ふ時に於て峰清信寄手の陣中に戦ひ死す年十六或は十八と云ふ(千種忠基濱田宗治林十藏加藤太郎左衛門上木の片山主計も共に討死す)清信は容貌美麗に心操も甚た優美なりしとて時人共事を歌詠せしといへり此時に峰の系統盡きしと云ふ

(五) 是を以て當世の書記等誤多きと知るへし五月六日は清信闘死の忌日と知るへし天正十二年甲申より今年に至るまで年曆二百四十九年なり

(辛) 惣括

(一) 凡關の五宗分系する所大概を前に記す按するに南朝正平廿二年

丁未春二月五日關東の宮方平一揆葛山と所領を争ひて武洲河越の城に立籠る同年閏六月十七日に葛山河越の城を攻め落す平一揆伊勢の國に逃登り龜山に住す是を關の一黨となす(然る時は建武年間尊氏將軍に軍忠ありと云ふは大概に云ふものなり)

(二) 又南朝の元中六己巳の年に云ふ其後南方の威勢衰へ(中略)伊勢の國司未だ威勢ありて伊勢の國に郡多く大和伊賀志摩を領し給ふ士卒には關の一黨島屋尾水谷(下略)云々す同九年壬申閏十二月南北兩朝御和睦あり

(三) 南帝北都に還幸し給ふ伊勢の國司北島顯泰公は本領舊の如し關一黨は將軍家に附屬す(此時初めて將軍に仕へしと見ゆ)應永廿一甲午の歲伊勢國司北島顯雅公御即位の事について謀反す關左馬助並に神戸峰國分鹿伏兎其外大和伊賀志摩の兵悉く馳せ集る(國司に従ふと見ゆ)

(四) 同廿二乙未の年春國司滿雅公兵を分ちて木造阿坂多氣大河内坂

内田丸の城を守らしむ關神戸峰國府加伏兎は拜野の城を守る京都の大將土岐左京太夫持益拜野の城を攻むと云ふ此時關家己に五宗に分つと見ゆ正平を去ると年曆凡五十年に垂々たり宗領の關は實治の子盛繁にあらすして其子忠賀の時か峰は政實にあらずんは其子主水の時か是を以て考ふる時は峰の城を築くは嘉慶康應の後なるへし應仁の亂には關豊前守盛元其子民部少輔盛貞其一族の率ひて三條殿を固むと云ふ此時代より專足利將軍に仕へしと見わたり

(壬) 系統

年曆を以て推し考ふるは時は則峰の系統卒年左の如し

● 越前守盛憲

元龜元庚午の歲十月十五日峰城に卒す卒する年關く

按するに大和守盛益作れ者是か

大和守盛定

一に次部少輔久次と云ふ或は云ふ久次卒して其子幼し故に

其領地を滅して他の邑に移り居らしむと天正戊寅三月五日
峰城に卒す時に四十八歳

按するに一に盛祐に作る

八郎四郎盛治

天正二甲戌年九月二日父の軍を率ひて織田の先鋒に従ひ長
島の戦場に討死す時に廿一歳

後に孫三郎と改む

與八郎清信

父卒する時清信年幼なり信長峯の城邑を没收して清信を以
て他の邑に移す別に小知を賜ふ天正十二年甲申四月勢洲の
地を落ち去りて尾洲に通る信雄の令を受けて濃洲加賀井の城
中に籠る城陥るの日羽柴の先陣に突戦し五月六日の夜を以
て敵中に討死す時に年十八或は十六

北勢四十八家

伊勢軍談に曰く

北勢四十八家由來

(甲) 千種家

- (一) 北勢四十八族は千種城主常陸介源忠治及神戸城主神戸藏人太夫平具盛を魁とす忠治は村上源氏の末流にて中院宰相具忠の長子千種頭忠顯の苗裔なり忠顯は後醍醐天皇に事へ伊勢に恩補地を賜はり目代を置いて之を治む天皇蒙塵の際供奉して吉野に赴き文和年中卒す長子少將其子陸通に至て吉野の朝敵せらるゝに及びて本領の地なる伊勢岡村に來り丸山に新城を築き村名を千種と改む通治より忠治に至る迄數代連続して近郷二十四村を領し士卒凡一千を率ひ何れにも屬せずして獨立せり
- (二) 弘治元年近江の六角義賢其將小倉河内守をして三千餘騎を以て伊勢に侵入せしめ敗れて近江に還り更に大舉して伊勢に侵入せんぞす千種家恐れて六角家の長臣後藤但馬守の子を諱とし家名を嗣かしめ千種三郎左衛門尉と稱せしむ此に依て宇野部萱生等も悉く六角家に屬す忠治薙髮して卜齋と號し男子を

生む又三郎と稱す因て之をして家を嗣かしめんと欲す三郎左衛門之を知りト齋の又三郎を伴ひて寺方村大日寺へ參詣せる折城戸を閉ちて遂に父子を追ふ

(三) ト齋己むを得ず家士を集めて川北村に據り三郎左衛門を攻むれとも克たす遂に近江に奔りて六角氏に寄れり瀧川一益長島に治するの時北勢の諸家も大略瀧川に屬し又三郎も表面瀧川氏に屬し實は心を六角氏に寄す瀧川謀りて之を殺すト齋遁れて伊賀に走る信長没後信雄に召されて音羽村六百石を領す養子左衛門は美濃の加賀井の戦に戦死す其後ト齋も大坂の陣に籠城して戦死せり

(乙) 神戸家

(一) 神戸治部少輔平忠光は共先は關左近太夫定忠の弟長崎次郎左衛門盛綱より六世の孫四郎盛貞に至り元弘二年高時滅亡の時に戰場を遁れて當國に來り關家の同族たるを以て神戸に住し神戸治部少輔と號す後薙髮して柏巖と號せり柏巖より五世の

(二) 孫下總守某は北畠教具の甥なり子なし北畠教具の子を養ひ具盛と名つく老ひて入道して樂三と號す
樂三の長子を入道悦岩と號す次男は赤堀家の養子たり女子は楠家に嫁す且つ長野家は政具の甥なれば長野家とも睦しく武威國內に盛なり藏人太夫友盛は悦岩の子にして關安藝守信盛と 동시에近江の蒲生定秀の甥なり凡る近郷二十五ヶ村を領し關家五大將の一人たり既に關家の條下に附記せり

(丙) 赤堀家

(一) 舊朝明郡羽津城主右京大夫藤原國光は陸奥の鎮守府將軍藤原秀卿の五男千常より第十一世の孫忠綱より出つ忠綱治承の役宇治川先驅の功を以て下野に地を給はる養和元年常陸の志田義廣平氏の餘黨を集め事を圖る忠綱亦之に與し小山四郎朝政に滅せらる忠綱の一子信濃に遁れ木曾山中に隠れ佐野小次郎と稱す

(二) 小次郎八世の孫に孫太郎景綱なる者あり伊勢に來りて多藝の

(丁) 楠家

國司家に事へ三重郡赤堀に築城して此に居り本姓に復して田原豊前守と號す景信の次男を掃部と稱す掃部より國虎まで五世相續き近郷を領して北畠氏の與力たり

三重郡楠城主諏訪十郎は信濃の諏訪の人なり元北畠親房の二男宮内の少輔友治の居住せし地なるか後三瀬に遷るに及びて信濃より來りて城主となり楠十郎と稱せり士卒五百人の大將なり

(戊) 朝倉家

舊朝明郡持福城主朝倉下總守光豊は鎮守府將軍平惟茂の後裔城鬼九郎の末孫なり壽永九年木曾義仲越前に於て城ノ太郎資永と戰ふ資永敗れ已にして病没す其子資光遁れて伊勢に來り茂福に任す資光より光豊に至るまで十世相續き一邑を領して神戸家の與力たり後織田氏に屬す

(巳) 南部家

舊朝明郡富田の城主南部少輔源兼綱は新羅三郎義光の後裔なり素此城は仲原肥前守なる者の有なりしか子孫斷絶するに及びて南部大夫頼武か祖父頼村信濃より來りて城主となる兼綱まで五世相續き富田卿六ヶ村を領せり後織田氏に屬す

(庚) 春日部家

舊朝明郡萱生城主春日部大膳亮平俊家は伊勢平氏富田三郎進士家資の後裔なり家資文治五年鎌倉に囚へられしに頼朝其武勇を感じ死を許して伊勢に流す其末葉春日部隼人宗方曾て西國へ移りしか再伊勢に還り萱生に城を築き近郷數村を領す宗方より四世にして俊家に至り其武威益盛にして千種家と諱頌す朝明員辨兩郡の士多く其下に屬せりと云ふ

(辛) 稻生家

舊奄藝郡稻生城主稻生勘解由左衛門兼顯は物部大連守屋の末葉和田五郎兼通の後裔なり信長に屬し元龜二年曾原の戰に戦死す

(壬) 矢田家

桑名郡矢田城主矢田半左衛門俊元は元姓を山内と稱す祖父山内主計俊頼は安藝の毛利氏の家臣にて永祿十一年戦死す父勘解由左衛門俊行は輝元に事へ元龜元年菊地との戦に戦死す俊元伊勢に下り國司の下に屬し矢田に城を構へて近村を領す天正五年瀧川一益に滅さる

(癸) 其他の諸家

(一) 田原家

三重郡赤堀城主田原肥前守は羽津城主の赤堀家と同家にて關家の下に屬す

(二) 田丸家

田丸彈正少弼源親信は北畠具教の一族なり
其城の所在不明

(三) 後藤家

三重郡宇野部の城主後藤民部實重は後藤兵衛實基の子右馬

(四) 沼木家

亟實貞の末流なり

舊朝明郡柿城主沼木太郎宗治は神戸の與力なり後に入道して宗喜と稱す弘治三年近江の小倉三河守に滅せらる

(五) 大矢知家

大矢知遠江守あり越前柴田に黨す

(六) 片岡家

桑名郡上深谷部城主に片岡掃部郎なる者あり

(七) 水谷家

桑名郡大鳥井城主に水谷與三兵衛なる者あり

(八) 栗田家

員辨郡繩生城主栗田監物季重は伊勢新九郎氏綱の末葉なり長氏の族と云ふ北畠家の下に屬し天正五年瀧川一益に滅せらる

(九) 高井家

(十) 小申家 員辨郡小山城主に高井民部少輔なるものあり北畠に屬せり

員辨郡猪飼城主小申次郎右衛門常政なる者あり北畠氏に屬す天正五年繩生城にて戰死す

(二) 赤堀家

舊朝明郡中野の城主に赤堀藤左衛門なる者あり

(三) 草薙家

桑名郡御衣野城主草薙出雲守なるものあり日本武尊膽吹山より還りて伊勢に入りし時の遺子ありと云ふ其地八劍宮あり神名帳に尾津神社となせり今に草薙の姓を稱するものあり

(三) 横瀬家

舊朝明郡廣永城主に横瀬勝五郎なるものあり

(四) 春日部家

舊朝明郡伊坂城主に春日部太郎左衛門なるもの者あり

(五) 江見家

〇〇〇〇山城主に江見名藤七郎なる者あり北畠に屬す

(六) 後藤家

桑名郡別所城主に後藤彌五郎なる者あり

(七) 後藤家

桑名郡糠田城主に後藤太郎左衛門なる者あり

(八) 春日部家

員辨郡星川城主に春日部若狹守なる者あり

(九) 毛利家

員辨郡桑部城主に毛利次郎左衛門なる者あり

(三) 松岡家

員辨郡上井城主に松岡彦之進なる者あり

(三) 富永家

員辨郡長深城主に富永筑後守なる者あり

(三) 保々家

(三) 員辨郡保々城主に保々越前守あり
多度家

(四) 員辨郡笠田城主に多度大藏助なる者あり
治田家

(五) 員辨郡治田城主に治田山城守なる者あり
片山家

○ 郡上木城主に片山主計なる者あり天正五年細生城に戦死す

(六) 西野家

員辨野尻城主に西野左馬助なる者あり天正五年細生城に戦死す

(七) 伊藤家

(八) 桑名郡桑名城主に伊藤武右衛門なる者あり
野村家

員辨郡島田城主に野村兵庫助なる者あり近江の佐々木氏の

末葉なり

(九) 濱田家

三重郡濱田城主に濱田遠江守宗武なる者あり又與右衛門ともあり堀木信濃守とも古記にあり

(一〇) 小阪家

梅戸城主に小阪源九郎政吉なる者あり

(一一) 近藤家

員辨郡白瀬城主に近藤彈正左衛門尉吉綱なる者あり

(一二) 種村家

員辨郡大泉金井城主に種村彈正左衛門尉其子千代次なる者あり瀧川の計に陥り長鳥に死す

(一三) 伊藤家

桑名郡松か島城主伊藤四郎重晴なる者あり文明四年古城を再營す本姓は工藤にして長野の族なり

(一四) 渡邊家

(三) 桑名郡東方城主に渡邊掃部郎なる者あり
矢田家

(三) 桑名郡走井城主に矢田市郎右衛門尉なる者あり
森家

(三) 桑名郡中江城主森小一郎及其子清十郎なる者あり信長に従
ひ北畠征討の際武勇を見はせり

(三) 安藤家

(三) 桑名郡深谷部柳か島城主に安藤左京進なる者あり
片岡家

(四) 桑名郡堺村城主に片岡掃部郎なる者あり
西松家

(四) 桑名郡柚井村城主に西松要人なる者あり
近藤家

桑名郡深谷部北狭間城主近藤右京亮教惠なる者あり其先は
藤原鎌足より出て藤原大藤内の後裔なり大當内伊賀名張

郡三崎の桑野に住す白鳳元年五月天武天皇吉野を去りて伊
勢に幸行の時大當内の許に宿す事平きて天皇帝大當内の功を
賞す其末葉に近藤三郎宗高なる者あり後醍醐天皇に仕へて
笠置落城の後京都に戦死す天皇隠岐より還御の後宗高の子
内藏亟に本領を安堵せしむ教惠は宗高七世の孫左京進か子
なり

以上凡て五十三家

按する北勢四十八家とは關氏の勢力範圍外に北勢に四十八
家の強族あるを指すなり然れども四十八家の強族ありしは
或る格段なる時期に一時存在せるにて其間に盛衰あり興亡
あるは免るへからざるの數なり今五十三家を拾ひ集めて之
を揚ぐ此中何れか四十八族以外の者たるを知らず

乙部家の由來

(一) 源三位頼政の子孫と云ふ元龜永祿の頃中川原伊豆守と號す但し

心月齋と云ひ龍華院と號す法名清縁名乗は不詳頼政より十六代の此人中川原に居住す代々濫見を以て居城とす然れども中川原は乙部領地なるを以て斯にも居宅すと云ふ伊豆守の子は兵庫頭藤政と云ふ家所にて討死す織田家との軍なり藤政の子は乙部源十郎政直と云ふ織田信意に仕ふ信意乙部を改て進藤と給ふ信長公の近き所縁の人を以て妻とす此人長命にて後にば大坂に住し延殿と號す(信意は信長を誤りたるものなり)

- (二) 源十郎の子を進藤三左衛門正と云ふ浮田中納言秀家に事ふ關原没落の後他事なく事付き従ひ秀家朽木の山中にて落人として卿民の爲に難義に及ぶの時秀家赤松家より傳へし靈劔を郷民へ預け與ふるの時三左衛門思慮深き人にて郷民の中片目の人ありけるに是を渡し右の難を逃れ薩洲へ赴き嶋津良伯を頼み居られける内嶋津家康公へ再三助命のとを佗に及ぶと雖關ヶ原にて一方の大將故命のみは御助被遊候へ共伊豆の大島へ流し遣はさる
- (三) 此時右の進藤外に黒田何某兩人は配所へも従行したく願ひけれ

(四) とも其御免なく猶又兩人の懇忠を聞召し及はれ兩人共召し抱へられんの上意有て駿府へ召さる内黒田は嶋津家へ召し抱へらる進藤は駿府にて御目見中七百石下され御旗下となる其後秀家所持の劍の事御尋ね有りけるに是は秀家主人赤松祐則より傳來の刀にて右山中にても心覺いたし預け置きぬとて山中へ赴き彼の心覺わの片目の男を尋ね出し右の刀を請取り家康公へ差上く右さくまい深智の程御感心遊されけるとかや

(五) 此刀は天國とも云ひ又は鳥飼國次の刀とも言ひ傳ふ三左衛門は一女三男あり一女は永興院殿とて木下肥後守殿國妻也隱居の後京都へも度々出てたる人にて今熊に屋敷ありしを進藤正益に譲り與へし人なり次男進藤三左衛門と云ふ家督相續す三男進藤長左衛門正勝と號す有家の親あるを以て備中籙森木下家にて千二石を以て奇偶す四男三左衛門は是又三左衛門の相續か名も三左衛門と號するを以てなり

(五) 長左衛門勝與男子二人女人數多あり嫡子は進藤正益と號て次男

は長左衛門勝奥と號す此の長左衛門母は木下殿妹なりと云ひ傳ふ嫡子正益は異也依て弟長左衛門には家督を讓て洛陽に居住し假りに醫を以て業とす長左衛門は家督を嗣て藤森にあり木下家分けある稱號なるを以て進藤を改めて杉原と給ふより杉原長左衛門と號す此長左衛門に男女の子數多あり家督を杉原丹解と號す此の丹解の時に至て菜地を滅せらるゝの内沙汰あり依て不足して京都伏見に浪人す其後七百石を以て召し返さるゝの内引合ひあり本地ならずんは丹解不承知の趣なり然れども親族頻りに勸むるを以て七百石にて藤森に歸參し今に相續す

(六)

進藤正益は京に在て勢洲一身田鈴木氏の妹を娶りて男子三人女子數多あり嫡子は養碩と號す父の業を嗣て醫を業とす此人江戸進藤三左衛門の養子の内約あり壯年にして死し其義なし京都寺町慈眼寺に葬る此寺元祿京都大火の後出水千本にうつるよし次男は一身田鈴木氏相續三男進藤九兵衛と號す杉原長左衛門因縁を以て木下家に仕官す丹解浪人の時祿を辭して京都に還る後僧

と爲りて律を修す五十有餘にして一身田にて往生す洛陽本誓寺母の墳墓に同葬す律の時の名を法恭と稱す正益居士洛陽慈眼寺に葬る

右は鈴木外記宗真居士の親本なり故に進藤家をとを記し置くなり

(七)

此の鈴木と號せしは開基者出家にて淨教院殿と申せし故俗姓無之に依て右淨教院の室鈴木家より見わし故母方の姓を呼んで先外記宗智より鈴木と號す外記宗真嫡子右近右兩人へ御所より今の桐の紋と飛鳥の姓を賜はる是堯惠様の由緒あるを以て堯園様より被下候也

伊賀侍の由來

伊亂記に曰く

(一) 服部一族

吳服部漢服部とて二流あり皆酒の君の末流なり中古當國の侍服部平内左衛門家長なる者武法の譽多く其の名遠近に隠れなく人

々之を尊敬せり是より服部氏ますく盛になりて國中に充滿す
 或る時清涼殿の弓場殿にて弓箭の勝劣を顯はす時に家長名譽あ
 りて七十九代六條院より眞羽の矢一千手車に積みて宣下あり家
 長自他の面目是に過ぎす是よりして矢筈車の紋を平氏服部一族
 の惣紋となせり其の紋三男迄は〇に二つ矢にして四男以下は〇
 に三つ矢を用ゆといふ服部一族の村々は服部羽根高島荒木寺田
 千歳佐那具槇山比土古郡猪田神戶四十九院阿保別府柏尾岡田寺
 脇川上諸木沖戈良依那具市部郡上友生下友生下友生西村西明寺
 内保上友田中友田古山七郷
 (二) 長田一族

往昔は藤原氏中頃池大納言頼盛長田郷を領知しければ其の威光
 を羨みて平の氏を稱號す清盛滅亡以後其の昔に立ち歸りて藤原
 の姓となる定紋洲濱幕の紋三階松に霞長田村朝屋村小田村法華
 村大の木村の五ヶ村は此の一類に屬す
 (三) 大邊一族

平家亡ひし後元久の頃須藤刑部亟經俊當國の守護となり鎌倉よ
 り來りて清水の里に館を造りて居住す鎌倉にての氏神を荏柄の
 天神と號す此の神を清水村に勸請していつき祭る依りて大邊の
 天神と稱す愚案するに天神七代大苦邊命なるかと大苦邊の中の
 字を略して大邊といふならん清水木興久米淺宇田四十九院の五郷
 之に屬す但し長田一族の内を分ちて大邊一族とは名くるなり經
 俊に隨ひて鎌倉より來る從類を此の五ヶ郷に住居せしめしなり
 然りと雖家の紋武門の作法等長田一族と異なる事なし
 (四) 宇多源氏

佐々木三郎盛綱か家譜を稱して源氏なり惣紋は四目結或は笹輪
 頭を付くるといふ東村
 (五) 川合一族

平信兼川合郷に居住す川合一族は其の末流なり惣紋は丸の内
 梶の葉川合馬場千貝田中大江圓徳院内保波敷野小杉石川川東川
 西山畑玉瀧の諸村は此の川合一族なり

磯矢氏岩嶋氏木津氏 以上三家は川合一族かり
長木氏中林氏奥氏 以上三家は服部一族平氏なり
(六) 藤原氏

上友田中友田下友田の三郷は惣紋梶の内に花菖蒲大内下ノ庄加藤一族の紋は二頭の二巴大内上ノ庄猪田森田の一族の紋は下り藤の九幕の紋割菱
(七) 比自岐一族

橘氏なり惣紋は六目結岡波摺見森界外上阿波比自岐は比自岐一族なり惣紋三星に一 ●●●
下阿波富永根延平松猿野濕付以上は比自岐一類にして郷内には無之歟
(八) 柘植一族

池大納言の従士彌平兵衛宗清濃洲青墓にて頼朝を生捕りて京都に登る清盛卿の命に依りて宗清之を預りいたはりかしく池大納言の御母公池の彈尼ひたすら頼朝の露命を悲しみ清盛に訴ふ

清盛繼母の愁訴に止む事を得ずして命を助け伊豆國蛭ヶ島に流し後に頼朝秀てて平家を亡し四海を手中に治むるに至り往昔の厚恩を忘れず宗清を召出し恩賞を謝せんとす然れども宗清之を領受せずして當國柘植の里に世を遁れ一僕の糧米を請けて此の里にて身を終る其の末孫今の柘植氏なりといふ姓は平氏なり惣紋は三頭右巴なり

一説柘植に藤原姓ありといふ上柘植の侍柘植十郎藤原有重木曾藏人行家に黨し播磨國室山合戦に平家侍越中次郎兵衛盛繼と配合引き組て討たれたり其の子孫源氏の代より繁榮す是れ藤原氏なり(伊水溫故参照)

(八) 島ヶ原一族

治承四年の夏源三位頼政宇治の合戦に打ち負け従士渡邊源三競頼政と一所に討死す彼か妻一人の子を伴ひ城洲相樂郡加茂の里に暫くの間影を匿くし漸く日を送りけるか其の後に至り嶋ヶ原に來りて其家大に繁榮す其の後七家に分れ其類葉増地氏嶋ヶ原

下村の地頭となる更に方流を分ちて増地小澤田榎河内奥松村富岡菊岡菊屋松田徳水勝矢滿岡吉川上田高濱高柳杉山米野西川松尾平地水口田島馬船池田の諸氏となる後醍醐天皇笠置城に籠らせ給ふ時七郷の者忠功あるによりて勅筆の感状を頂戴して郷士の家に傳來す其の後尊氏將軍に仕へて功あるにより持明院殿より十六葉の菊の紋宣下あり薄墨の御震筆を拜受したりといふ惣紋は〇〇〇

(九) 矢具島一族

藤原氏惣紋輪違ひ上神戸下神戸上林の三郷は此の一族に屬す

(八) 予野一族

藤原氏池邊の春日勤請により初めて惣紋丸の内に橘を許さる予野治田白樫大瀧桂の五郷此の一族なり

(七) 名張一族

惣紋丸の内に橘

(三) 服部の二流

服部といふに秦漢の二流あり應神天皇の御宇に吳の國と漢の國と兩洲より絹を縫ひ或は織のへ或は綿を摘み糸をひく賢女あり酒の君といへる智人を差し添へ渡しければ 天皇甚彼等を寵愛し給ひて殿字を造りて住ましめ給ふ吳の國より渡る織姫を吳服といひ是より衣類を吳服といふ又漢朝より來れるを漢服といふ酒の君は之を守護し其の營む業の織引絹綿を裁判して司る所の長なり此の如くに所務するものを昔は部といひ名付くされは酒の君當國阿拜郡服部の里を領知して居住し吳服の服の字と部の字との二字を以て服部とは稱するなり此の元祖は酒の君なり此の里に小宮の社とて延喜式二十五坐の靈神まします是酒の君の靈詞なり遙かの末に至りて服部平内左衛門家長新中納言知盛卿に仕へて武略の名譽あるに依りて當國普ねく家長か家風を學ぶ又服部六郎時定といふ者當國の住士にて頼朝公に仕ふ其時に當り三位入道頼政か孫左衛門尉有綱及志田三郎義憲義經公に組み

吉野山に閉ち籠りけるに法師に攻められ一黨散亂して義憲も落人となり寺田の里に隠れける服部六郎時定岡山邊に押し寄せ攻め戦ひしに義憲打ち負け千戸村千戸寺に駆け入りて自害を遂けたり有綱は祖父頼政の舊領名張郡薦生の里に影を隠し服部六郎時定發向して是を誅すされは時定の末葉と平内左衛門家長の族門と二流あるへき所に末世に至りて度々の兵亂に昔の素姓を忘れ悉く家長の風流を移すに至れり猶又服部氏一流あり往古より以來敢國の祭禮は十二月初の卯日なり花園川原に旅館を造り神興二社を移すなり少彦命金山姫旅館にはかりに七ヶ日留まり神官束帶して神樂を奏し神歌の一曲をかふてとねくらを捧ぐる事古風なりとて其の品怠る事なし件の神事を望み當國の名士彼の川原に列坐し饗應丁寧に拵らへ酒興をなして神慮をすゝむる事を例とす此の營みを世俗にくろうとと名付く其の費千石なり自分として調進するもの稀にして親類互に力を合せて祭禮をかい繕ふに此の祭禮をつとめし輩たとへは凡下たりとも賤種を除きて服部

氏を免許する事前代の法式なり三流の氏今更分明ならずくらうと云ふ事は大儀を立て、營む祭禮なれば名付けしか
伊水温故に曰く

服部氏に三流あり漢服部は平内左衛門相續し平氏なり紋は丸に二つ矢なり但し惣領庶子により違ひあり吳服部は服部六郎時定相續し源氏也紋は一ツ巴或は二ツ巴三ツ巴左右もあり敢國服部は一の宮神事を勤むるの族姓は源氏なり紋は其の郷々に依て相違あり大方は八本矢羽なり

33
565

著作
權
所有

明治四十年九月二十日印刷
明治四十年九月二十五日發行

(定價金四拾錢)

發行所

三重縣史料保存會

編輯兼發行者

三重縣河藝郡一身田村拾六番屋敷

小野茂吉

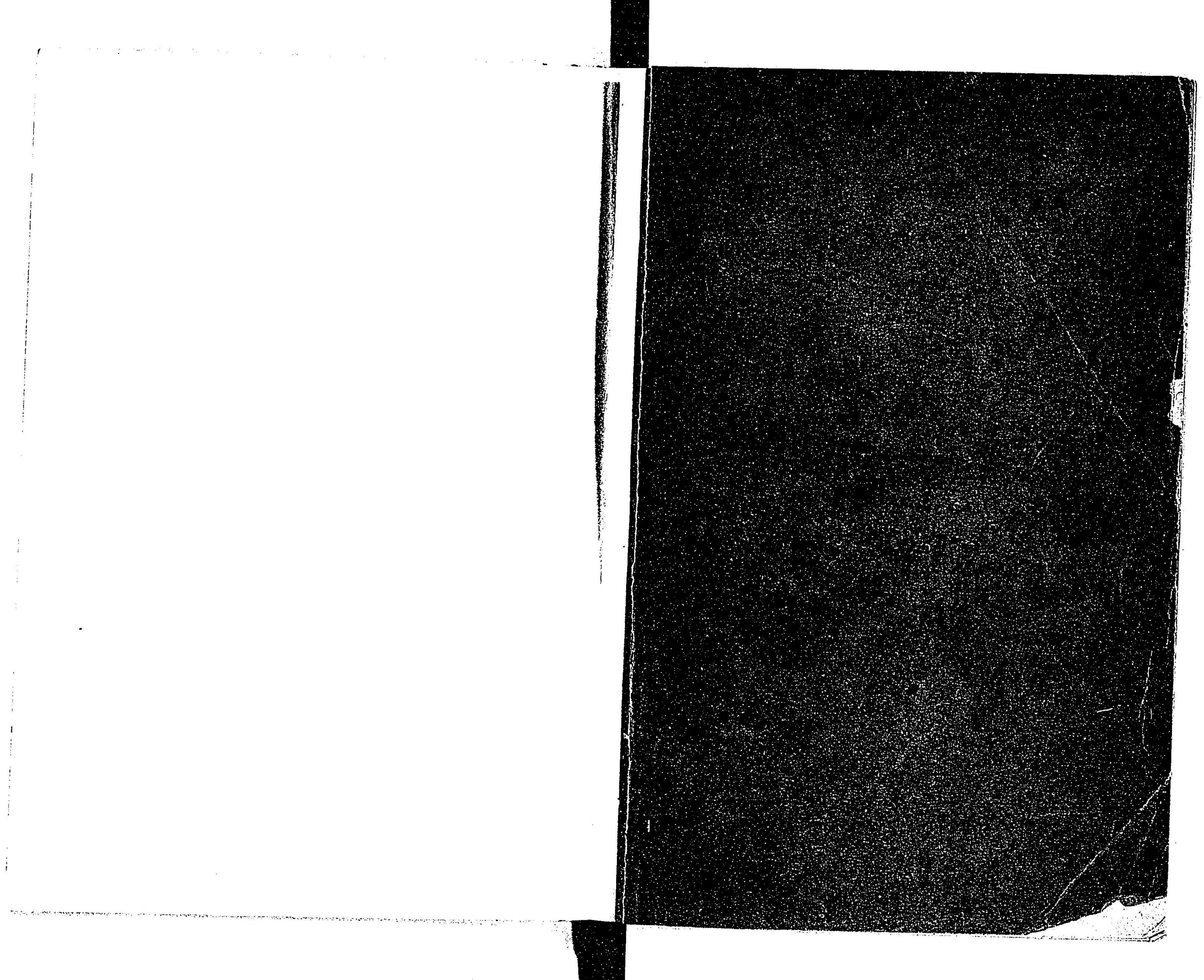
振換貯金口座八六六七番

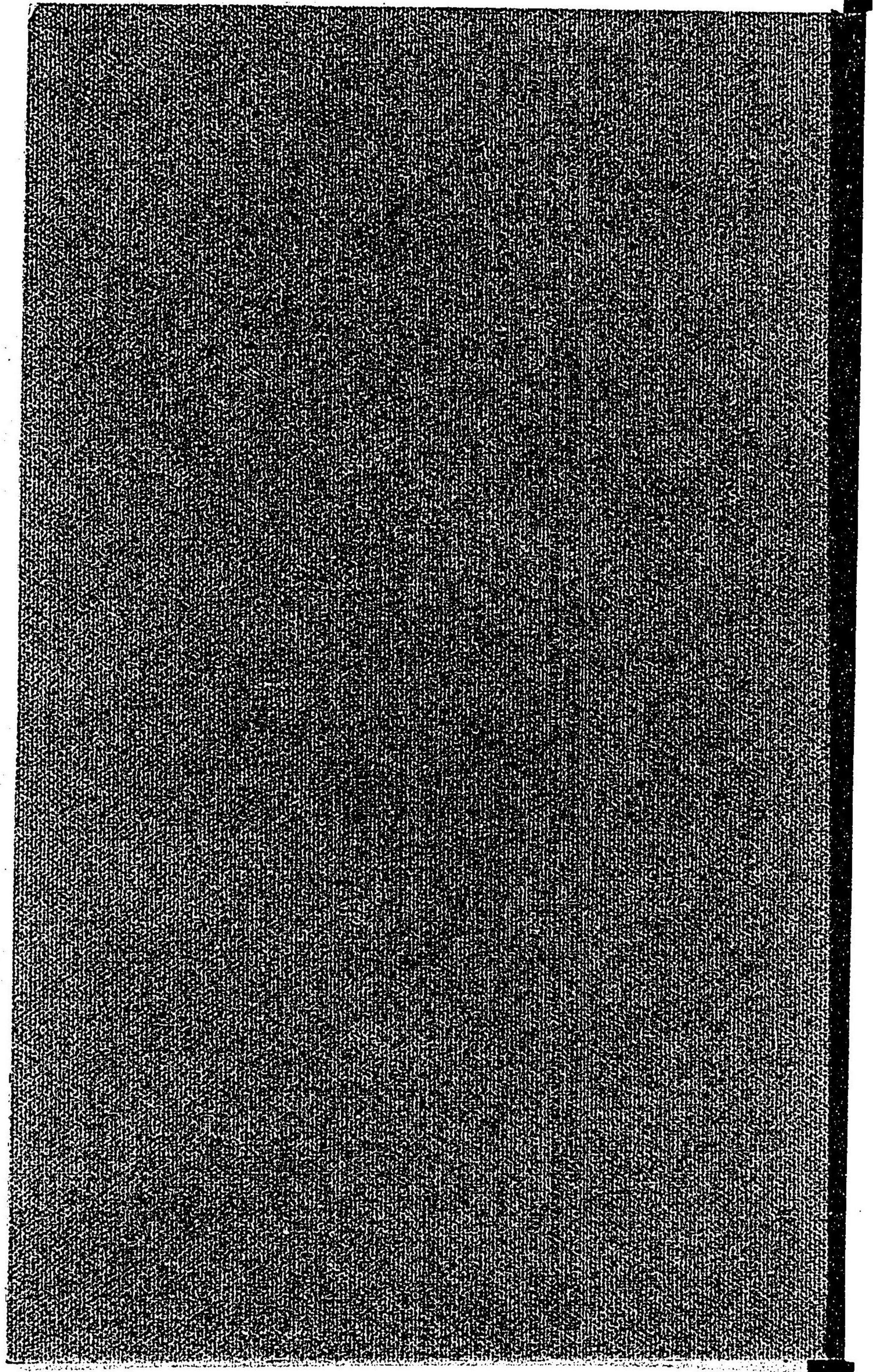
印刷者

三重縣津市釜屋町貳拾壹番屋敷
鈴木嘉兵衛

印刷所

三重縣津市釜屋町貳拾壹番屋敷
鈴木活版





33

565

(M)

